

古代史を解明する会

第43回

文献と考古資料の対応  
「神話時代全体・年表」

2024年8月10日

丸地三郎

# はじめに

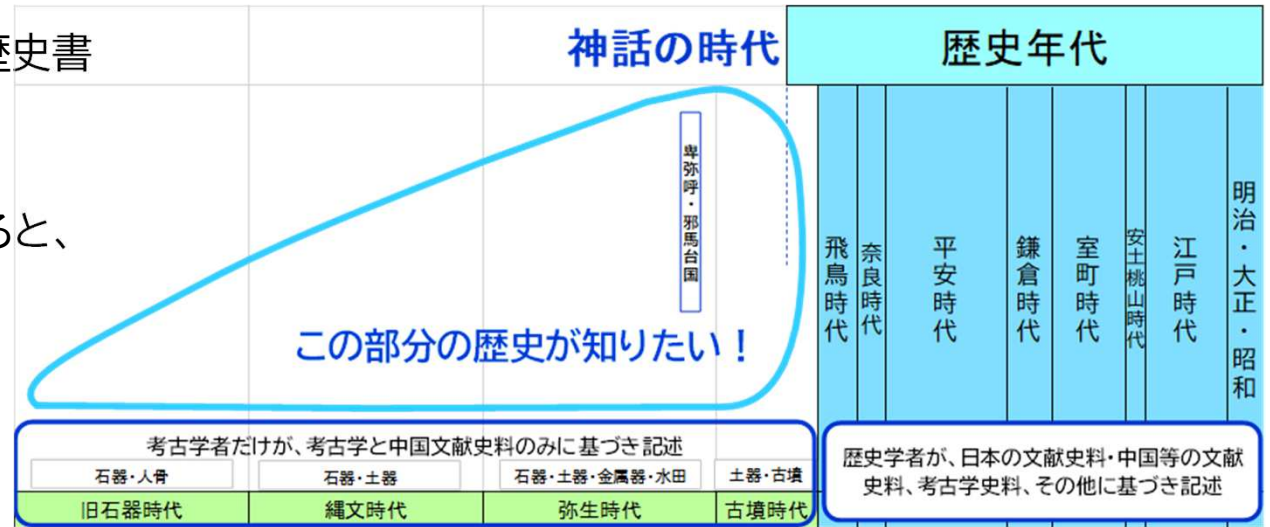
- 古事記・日本書紀に記された日本神話を歴史として読み、考古学・古地理・伝承・神社などと比較・検証する試みを行った。
  - 今回は、その期間全体の俯瞰図を検討、年代を検討し年表を作成する。
- それに先立って
  - 「古代史を解明する会」で検討開始した第34回から10カ月の経過を辿る。
  - 当会の目的とする「古代史解明」を改めて紹介
- 検討の整理
  - 記紀の神話伝承から古代史の復元
    - 時間軸を揃え、空間・地域を確認
    - 神話の主要事件の時代順の整理し直し
    - 古代史復元のための解釈
      - 須佐之男命・高天原へ→誓約→天岩戸事件→須佐之男命追放→天孫降臨→邇邇芸命の結婚→日向三代→国譲り→神武東征の順で、記紀を解釈
  - 考古学・古地理・伝承・神社などとの比較・検証
    - 天孫族・出雲族の考古学的な区別
    - 王墓
    - 戦争の証拠
    - 天孫族/出雲族の勢力範囲
    - 土器
    - 魏志倭人伝
- 年表作成・俯瞰図
  - 人の寿命を加味した年表
  - 俯瞰図

# 「古代史を解明する会」第34回からの経過を辿る。

- 34.「天孫降臨と史実の関係」(2023年10月7日)
  - 伊藤雅文氏: 『日本書紀』が書いた瓊瓊杵尊の天孫降臨
  - 清水徹朗氏: 宝賀寿男の天孫族起源論
  - 可児俊信氏: 天孫降臨と史実の関係
- 35.「邪馬台国と高天原の関係」(2023年11月11日)
  - 可児俊信氏:
- 36.「日向三代の記述の理由」(2023年12月9日)
  - 丸地三郎:
    - 記紀の記述の内容を確認
    - 前段の天孫降臨と後段の神武東征及び 全体の流れを再検討
- 37.「文献と考古資料の対応:天孫降臨・日向三代」(2024年1月13日)
  - 記紀から古代史を復元する試みを行った。
  - 記紀の記した歴史と、考古資料・中国史書と対比を行うことにした。
- 38.「文献と考古資料の対応:天孫降臨・日向三代」をふまえての意見と議論(2024年2月10日)
- 40. 文献と考古資料の対応:出雲国譲り(2024年5月4日)
- 41.「文献と考古資料の対応:神武東征」(2024年6月8日)

# 課題と対応策・方法論

- 終戦後75年間、この時代については、古事記・日本書紀の「神話時代」と呼ばれる時代の記述を、非科学的であるとして全て排除してきた。
  - 考古学者だけが、考古学と中国の歴史書  
のみに拠って歴史を書いて来た。
- 記紀・風土記の記述が、考古学の成果  
や、古代地質学等に照らし合わせてみると、  
事実であったことが明らかになった。
- 歴史学会が取り組まない現状では、  
私達、アマチュアがやるしか無い。



- 文献史料などにより、全く新規に、日本古代史を作り出すのが、「弥生時代から古墳時代」の歴史。
  - 発想も新たに、ゼロから歴史書を作りだす作業となる。
  - 方法論
    - 古事記・日本書紀・風土記などの文献史料を活用する
      - 活用之際には、史料批判(文献の信ぴょう性を検証)を必ず行い、誤りを排除する。
      - 時間軸と空間の整理を行う。
        - 歴史家の眼で内容を読み直す。
      - 考古学資料との整合性を取る
    - その他の史料：神社・仏閣の由来・主祭神及び分布 民俗学・民俗学の成果などを積極的に活用し整合性を取る。
      - 科学的年代測定の活用(但し、非科学的な取り扱いによる誤用は排除)
      - 関連科学(地理学・地質学・農学・生物学・医学・海洋学・人類学など)

日本古代史ネットワーク  
第3回 解明委員会

テーマ：  
弥生時代から古墳時代  
基本レポート

国生み・人生みの神話の後、以下が記される。

1. 天照大神(アマテラスオオカミ)と須佐之男命(スサノオノミコト)の対立
  - ①天照大神(アマテラスオオカミ)が武装して、須佐之男命(スサノオノミコト)の到来を待つ
  - ②天照大神と須佐之男命の誓約
  - ③須佐之男命の狼藉
  - ④天の岩戸事件
2. 須佐之男命の追放
  - ①八岐大蛇(ヤマタノオロチ)退治と出雲の国造り
3. 大国主命の神話
  - ①八上比売(ヤガミヒメ)への求婚の旅・因幡(イナバ)の白兔神話
  - ②八十神(ヤソガミ)の迫害
  - ③根の国訪問(須勢理毘売命(スセリビメノミコト)との婚姻)
  - ④奴奈川比売(ヌナカワヒメ)へ求婚
  - ⑤須勢理毘売命(スセリビメノミコト)の嫉妬
  - ⑥少名毘古那神(スクナヒコナノミコト)と国造り

4. 葦原中国(アシハラノナカツクニ)の平定(出雲の国譲り)

- ①天菩比神(アメノホヒノミコト)の派遣
- ②天若日子(アメノワカヒコ)の派遣
- ③建御雷神(タケミカツチ)の派遣
  - ・事代主神(コトシロヌシノカミ)の服従
  - ・建御名方神(タケミナカタ)の不服従と服従
- ④大国主命(オオクニヌシノミコト)の国譲り

5. 天孫降臨(テンソンコウリン)

- ①天忍穗耳尊(アマノオシホミミノミコト) 降臨せず
- ②子の瓊瓊杵尊(ニニギノミコト) 降臨
  - ・猿田毘古神(サルタヒコノカミ)・猿女の君(サルメノキミ)・従者達
  - ・木花之佐久夜毘売(コノハナノサクヤビメ)
- ③火遠理命(ホオリノミコト)
  - ・海幸彦・山幸彦
  - ・海神の宮訪問
  - ・火照命(ホデリノミコト)の服従
  - ・鵜葺草葺不合命(ウガヤフキアエズノミコト)誕生

## 6. 神武東征

- ① 五瀬命(イツセノミコト)と3兄弟で東征の会議
- ② 筑紫の岡田宮・阿岐(アキ)国の多祁理宮(タケリノミヤ)・吉備(キビ)国の高島宮(タカシマノミヤ)
- ③ 浪速(なにわ)国の白肩津(シラカタノツ)
  - ・ 長兄の五瀬命が負傷、退却し、
    - 東から攻めることを宣言
- ④ 紀国の男之水門(オノミナト) (五瀬命死亡)
- ⑤ 熊野で暴風雨に遭遇 (残る2兄 海難死亡)
  - ・ 神武とその配下が熊野の荒坂津へ舟敷戸畔(ニシキトベ)を誅す
  - ・ 高倉下(タカクラジ)が剣発見、大和へ進軍
  - ・ 菟田(ウダ)・国見丘・鳥見(トミ)など転戦
- ⑤ 大和入り
  - ・ 天津瑞(アマツシルシ)(天の羽羽矢など)を示されたことから、饒速日命(ニギハヤヒノミコト)が 恭順し、戦闘終結
  - ・ 大和入りし、畝火(ウネビ)の白橿原宮(カシハラノミヤ)で即位
  - ・ 事代主の娘(伊須気余理比売(イスケヨリヒメ))を皇后に選定

## 7. 手研耳命(タギシミニ)の乱と後継天皇

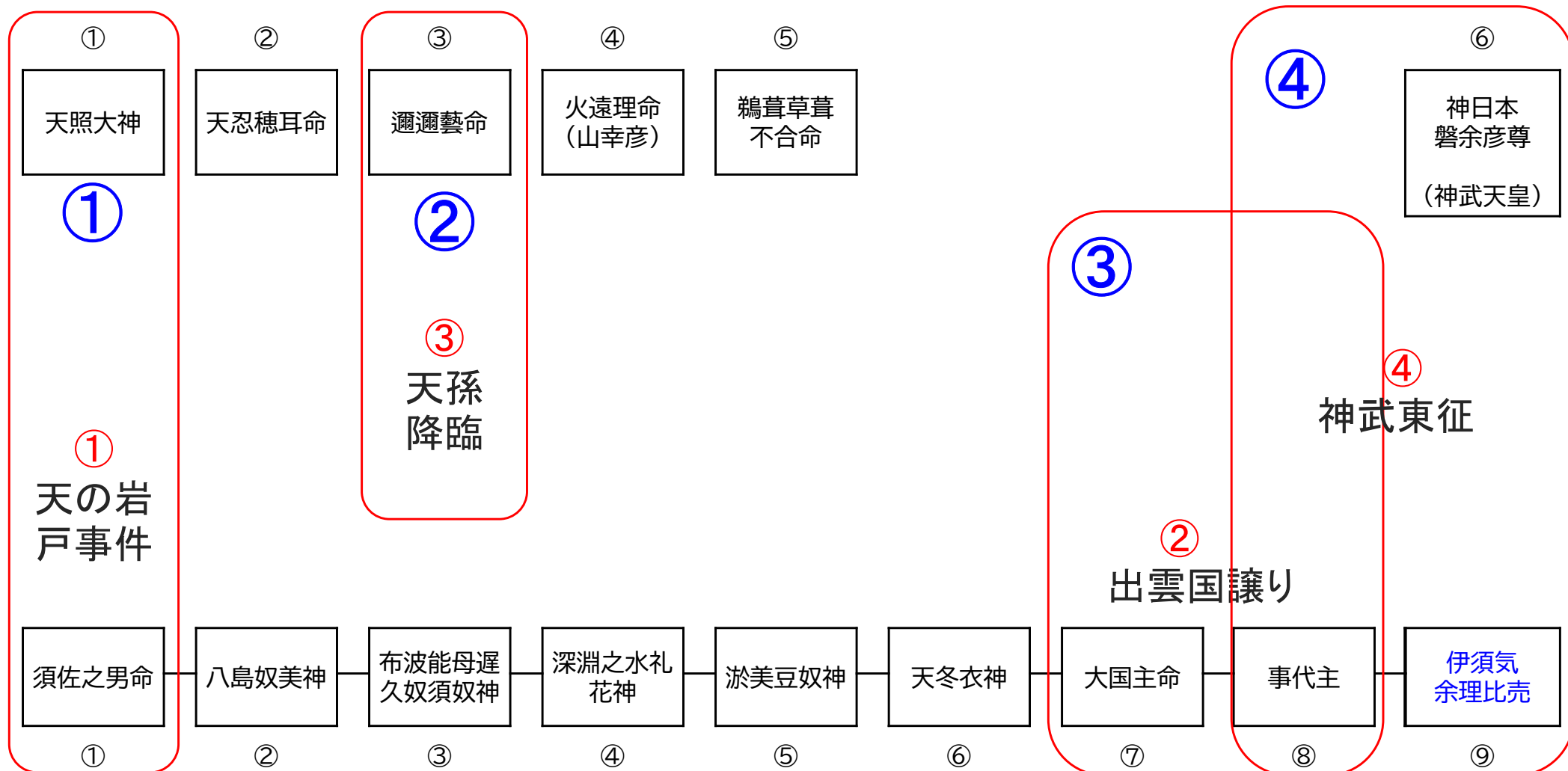
- ① 手研耳命の乱 (神武天皇の崩御後、九州から同行した子が権力奪取)
- ② 皇后(伊須気余理比売)の子:神沼河耳命(カムヌナカワミミノミコト)が、手研耳命を殺害、
- ③ 綏靖(スイセイ)天皇として即位
  - ✓ 綏靖天皇、事代主の娘(五十鈴依媛命(イスズヨリヒメノミコト))を皇后とする
- ④ 子の安寧(アンネイ)天皇が即位
  - ✓ 安寧天皇、事代主の孫娘を皇后とする

## [時間軸の整理]

- ・ リストアップした神話の事件をたどってゆくと、
  - ・ 神話の事件の順番と登場人物の辻褄が合わない気がする。
  - そこで、時間軸を揃えて整理して行きたい。
    - ✓ 残念ながら、各々の事件の年代は分からない。
    - ✓ 日本書紀・古事記の年代については、正確ではないことが、既に、論議されている。
- ・ 登場人物とその親子・子孫の関係が、一つの糸口になる。

# 古事記・日本書紀等の歴史としての読み方

- 事件の当事者と系図の対応を調べることで、事件の順序が判明。
- 事件の順序は、①天の岩戸事件②天孫降臨③出雲の国譲り④神武東征



# 天の岩戸事件の解釈

## • 天の岩戸事件の経緯と解釈

- 須佐之男命が高天原に来ることが判ると、天照大神は、武装して待ち構える。 →戦争を示す
- 須佐之男命の弁明があり、「うけい(誓約)」が行われ、3姉妹/5兄弟が生まれる。 →講和
- 須佐之男命が高天原に入り、乱暴・狼藉を行う。 →戦争再開
- 天照大神は岩戸に隠れた。 →須佐之男命勝利/天照大神敗北
- 八百万の神々が天の安河の川原に集まり →天孫側の援軍到来
- 天の岩戸の開放を画策し、成功 →援軍側の勝利
- 須佐之男命を捉え、罰を与え、追放 →須佐之男命敗北・追放

## • 天照大神と須佐之男命の戦い

- 天照大神(天孫族・天津族)と須佐之男命(出雲族)は、異民族の戦いでは無く、同じ倭人の勢力争いと理解できる。(天照大神と須佐之男命を兄弟として記述していることから推定。)
- 天孫族は、天照大神まで、天之御中主から12代続く。
  - 高天原は、実際には、北九州に存在したと理解する。
  - 天孫一族の特長は、三種の神器(剣・勾玉・鏡)
- 須佐之男命は、同族であるが、天孫一族とは別系統の一族で同じく北九州に存在した。

- ✓ 12代と長く続く天孫族の高天原政権に、別の一族の須佐之男命が反旗を掲げ、高天原を攻めた戦いで、一時講和し、小康状態を経たが、須佐之男命が武力で高天原を蹂躪し、勝利した。しかし、天孫一族の援軍が現れ、須佐之男命軍を撃退し、王である天照大神を救出し、須佐之男命を捕虜とし、九州から追放した事件と理解する。



# 天孫降臨・日向三代の記述

## ✓ 天孫降臨で、

- 天兒屋命など主要な人物を付け、三種の神器などをもち、武装した人を伴う。
- 筑紫の日向の国に降り、吾田の長屋の笠狭碕に立つ
- 猿田毘古神と天宇受売命の挿話

## ✓ 日向三代の神話

- **邇邇藝命**と木花之佐久夜毘売の結婚(石長比売の挿話)
  - 笠狭の御前で、木花之佐久夜毘売(神阿多都比売)と会う
  - 醜い姉(石長比売)を追い返し、長寿では無くなる、
  - 火の産屋の出産
- 海幸彦/山幸彦の誕生
  - 海・山の狩猟用の得物の交換 : 山幸彦が釣り針を紛失
  - 弟・**火遠理命** : 海神の宮訪問・海神の娘 = 豊玉姫と結婚
  - 潮満珠・潮乾珠/海幸彦 = 火照命の服従、
- **鵜葺草葺不合命**の誕生
  - 豊玉姫: 生む時の鰐の姿を見られ海へ帰る
  - 海神の妹 = 玉依姫が乳母として来る
  - 鵜葺草葺不合命が玉依姫と結婚
  - 五瀬・稲飯命・三毛野命・神倭伊波毘古命(神武天皇)の誕生

後  
段

- 出雲の国譲り
- 神武東征へ

岩波文庫

日本書紀  
卷第二頁130  
~132頁131の注十五  
は次頁

て曰さく、「天神の求ひたまふ所を、何ぞ奉らざらむや」とまうす。故、大己貴神、其の子の辞を以て、二の神に報す。二の神、乃ち天に昇りて、復命をもて告して曰さく、「葦原中国は、皆已に平け竟へぬ」とまうす。時に天照大神、勅して曰はく、「若し然らば、方に吾が児を降しまつらむ」とのたまふ。且將降しまさむとする間に、皇孫、已に生れたまひぬ。号を天津彦彦火瓊杵尊と曰す。時に奏すこと有りて曰はく、「此の皇孫を以て代へて降さむと欲ふ」とのたまふ。故、天照大神、乃ち天津彦彦火瓊杵尊に、八坂瓊の曲玉及び八咫鏡・草薙劍、三種の宝物を賜ふ。又、中臣の上祖天兒屋命・忌部の上祖太玉命・媛女の上祖天鈿女命・鏡作の上祖石凝姥命・玉作の上祖玉屋命、凡て五部の神を以て、配へて侍らしむ。因りて、皇孫に勅して曰はく、「葦原の千五百秋の瑞穂の国は、是、吾が子孫の王たるべき地なり。爾皇孫、就でまして治せ。行矣。宝祚の隆えまさむこと、当に天壤と窮り無けむ」とのたまふ。

已にして降りまさむとする間に、先驅の者還りて白さく、「一の神有りて、天八達之衢に居り。其の鼻の長さ七咫、背の長さ七尺余り。当に七尋と言ふべし。且口尻明り耀れり。眼は八咫鏡の如くして、絶然赤酸醬に似れり」とまうす。即ち従の神を遣して、往きて問はしむ。時に八十万の神有り。皆目勝ちて相問ふこと得ず。故、特に天鈿女に勅して曰はく、「汝は是、目人に勝ちたる者なり。往きて問ふべし」と

# 天の岩戸と天孫降臨の対比

## • 天の岩戸の登場人物

- 天照大神
- 思金神（思兼神）
- 天津麻羅 {鍛冶師}
- 伊斯許理度売命（石凝戸邊）
- 玉祖命
- 天児屋命
- 布刀玉命（太玉命）
- 天手力男神（手力雄神）
- 天宇受賣命（天鈿女命）

- 天明玉
- 天日鷲

- 八咫鏡
- 八尺瓊勾玉

- 建速須佐之男命

## • 天孫降臨の登場人物

- 天忍穗耳命
- 邇邇藝命
- 猿田毘古神

- 天児屋命、  
布刀玉命、  
天宇受賣命、  
伊斯許理度売命、  
玉祖命

- 思金神、  
手力男神、  
天石門別神

- 登由宇氣神
- 天忍日命
- 天津久米命

- 三種の神器

- ✓ 天孫降臨の主要な従者は、天岩戸事件の主要な人物と同じ。
  - 天の岩戸事件の、何年ぐらい後だろうか？
- ✓ 三種の神器を持ち、葦原水穂の國を治めるために天降る。
  - この天孫降臨をどう理解すべきか？

## 岩波文庫「日本書紀」の「注」に注目 : 天岩戸の説話の次に、この天孫降臨の話が続いていた

三五以下一三二頁八行まで天孫降臨の話。↓一二〇頁注九。ここにいわゆる三種の神宝の授与が述べられる。これは本文にはないが記には見え、第二の一書では鏡だけの授与となっている。なおこれらの神宝のうち八坂瓊の曲玉は第七段(七六頁六行)に、八咫鏡は第七段(七六頁七行)に、草薙剣は第八段(九二頁一一行)にはじめて見える。これらそれぞれの宝物がここで一つに纏められて皇孫に授与される。ここに現われる八咫鏡・天児屋命・太玉命・天鈿女命・石凝姥命などは、すべて、天岩戸に天照大神が隠れた時に関係のあった物と人と神。記紀の物語の構成は、もとは、天岩屋の説話の次に、この天孫降臨の話が続いていたものと見られ、その中間に、素戔嗚尊と出雲の八岐大蛇の話とが割り込んだものである。人物や物が、天岩戸の話と、天孫降臨の一書との間に脈絡があるのは、その結果である。

当会の設立記念講演会で示した記紀の物語の事件の順序は、主登場人物の親子関係・系図に沿って決まるとしたが、岩波文庫の日本書紀の「注」は、従者のメンバーの顔触れから、天の岩戸事件の次に天孫降臨が行われたと記載。結果的に、事件の順序が同一で、正しい神話の読み方となる。

- 注一五 以下一三二頁八行まで天孫降臨の話。→一二〇頁注九。
  - ここにいわれる三種の神宝の授与が述べられる。
  - これは本文にはないが記には見え、
    - 第二の一書では鏡だけの授与となっている。
    - なおこれらの神宝のうち八坂瓊の曲玉は第七段(七六頁六行)に、
    - 八咫鏡は第七段(七六頁七行)に、
    - 草薙剣は第八段(九二頁一一行)にはじめて見える。
    - これらそれぞれの宝物がここで一つに纏められて皇孫に授与される。
- ここに現われる八咫鏡・天児屋命・太玉命・天鈿女命石凝姥命などは、すべて、天岩戸に天照大神が隠れた時に関係のあった物と人と神。
- 記紀の物語の構成は、もとは、
  - 天岩戸の説話の次に、この天孫降臨の話が続いていたものと見られ、
  - その中間に、素戔嗚尊と出雲の八岐大蛇の話とが割り込んだものである。
  - 人物や物が、天岩戸の話と、天孫降臨の一書との間に脈絡があるのは、その結果である。

# 日向三代：木花之佐久夜毘売との結婚

## ● 邇邇藝命と木花之佐久夜毘売の結婚

- 笠狭の御前で、木花之佐久夜毘売(神阿多都比売)と出会う。
- 親の大山津見神は大喜びで、姉を添え、祝いの品物と一緒に、娘達を送り出した。
  - 醜い姉(石長比売)を追い返えされた。長寿では無くなるとのやりとりがあった。
- 一晩で妊娠したのはおかしいと云われ、火の産屋の出産。
- この話を歴史としてどう読むか？
  - 木花之佐久夜毘売の話：一夜で妊娠した。これを邇邇芸命達は疑った。
  - このような事態は、婚姻自体に、何も問題が無ければ、起きない事態。
  - 一晩寝て、翌日からは離れ離れに暮らしたことになる。
  - 又、邇邇芸命との一晩の性交で妊娠は有り得ないとの疑いを晴らす必要があった。
- 木花之佐久夜毘売の父：大山津見神は、石長比売の件で怒り狂い、一晩で木花之佐久夜毘売を連れ戻した。
  - それっきり、絶縁状態を保った。
  - 邇邇芸命の側も、すっかり忘れる/冷えた状態になった。→在地の部族との諍いを象徴。
  - しばらくして、木花之佐久夜毘売の妊娠が発覚し、出産・認知の問題が発生した。
    - このような状態が有って、初めて、『一晩寝て、翌日からは離れ離れにに暮らした』ことになる。
- 火の産屋の出産
  - 神話では、産屋に火を放つて燃え盛る時に出産したことになる。
    - これは「お伽噺」ですが、ベースとなる事象として、東南アジアや奄美地方にも残る風習で、出産直後に体温が下がり健康上の問題発生を避けるため、産屋内で火を焚くことがあり、夏でも、火を焚く。
    - 男共には、火を焚くことは、奇妙な風習に思えるので、産屋の中で火を焚いたことを、殊更に強調して、「お伽噺」を作り上げたものと推察する。
- この話のストーリー展開は、合間、合間に、現実ではない「お伽噺」が入っているが、事件を推測できる事象がしっかりと、書き込まれている。

## 日向三代：海幸彦/山幸彦の兄弟の争い

### ● 海幸彦/山幸彦の兄弟の争い

- 海・山の狩猟用の得物の交換：山幸彦(弟)が釣り針を紛失し、トラブルとなる。
- 山幸彦:火遠理命：海神の宮訪問・海神の娘＝豊玉姫と結婚
- 潮満珠・潮乾珠を得て、海幸彦＝火照命が服従。
- この話を歴史としてどう読むか？
  - 執拗な返却要求は、深刻な兄弟の争いが見て取れる。
    - 邇邇芸命の後を継ぐべき兄弟の争いは、王位継承争いと思われる。
  - 海中の竜宮城へ行ったような記述だが、執拗な返却要求に困った弟が、逃げ出し、海人族の島/地域へ行き、その首長の娘と結婚し、海人族の支援を受けて、故郷に戻ったと考える。
  - 潮満珠・潮乾珠は「お伽噺」の道具で、実際は、海人族が、武力・政治力を使い、兄・海幸彦を追い込み、弟が王位継承争いに勝ったことを意味する。
  - 山幸彦:火遠理命が王位継承。

# 日向三代：鵜葺草葺不合命

## • 鵜葺草葺不合命の誕生

- 豊玉姫:生む時の鰐の姿を見られ海へ帰る
- 海人の妹=玉依姫が乳母として来る
- 鵜葺草葺不合命が玉依姫と結婚

## • この話を歴史としてどう読むか？

- 山幸彦:火遠理命が、めでたく王位継承を行い、海人族の娘の豊玉姫が正妃となる筈が、仲違いをして、里に帰ってしまっただけのことを、お伽噺風に作り記載したもの。
- 海人の妹=玉依姫が乳母となった話は、あり得ることで記述通りと解釈。

✓ 但し、姉妹を同時に妻にする話は、記紀には沢山あり、山幸彦:火遠理命が、豊玉姫と玉依姫を妻にしたと解釈する。

✓ 記紀では、祖先の時代を古く見せるため、生存期間の引き延ばしだけでは無く、兄弟の王位継承を親子関係として継承したように記述し、系図上の引き延ばしを行ったものと推定。

- こう解釈すると、鵜葺草葺不合命については重要な出来事は起きなかったことになる。
  - 重要なことをしなかった王の名前を、どうしても、残したかった理由が、何か有りそうに思える。

## • 妃・姉妹の子供達

- 姉の子供は、何もせず、名前だけの残った。
- 妹の子供は、五瀬/神武の4兄弟で、神武東征で、3人は途中犠牲になり神武が成功した。
  - 名前だけ残した鵜葺草葺不合命は、実は、記述しない大事件の立役者・主人公だったのではないか？

# 天の岩戸/天孫降臨/日向三代 の解釈:まとめ

- 天孫一族は、天照大神まで、天之御中主から12代続く家系の主要な物語が、ここから始まることは、天照大神が、歴史上に残る偉大な「王」であったことを示す。
- その天照大神が、同族の須佐之男命の一族と対立し、
  - 高天原に居た天照大神が、須佐之男命に攻められた。
  - 「誓約」により、停戦・休戦が行われたが、
  - 須佐之男命が「狼藉」=戦争を再び仕掛け、
  - 高天原は敗戦し、天照大神は逃避した。
  - 遠隔地にいた天孫一族が援軍となり、高天原を取り戻し、逃避していた天照大神が救出された。
  - 須佐之男命は、捕まり、罰を受け、遠方に追放された。
- 高天原は繁栄
  - 天照大神の世代から天忍穗耳命の世代に代わった。
  - 須佐之男命が追放されて20-30年後、再び、須佐之男命の子孫=出雲一族が台頭し、高天原を脅かした。
  - 出雲一族の勢力に押された天忍穗耳命は、厳しい選択をせざる得なかった。
    - 長男の天火明命を出雲族側に送った。(政略結婚/人質として差し出したか?)
    - 次男の邇邇芸命に王権を譲り(三種の神器を渡し)、多くの重臣や、刀鍛冶や鉄・鏡・玉作の生産者、主な武将を添えて、乃ち、ほぼ一国を構成する人員を帯同して、新天地へ移動させた。
- 天孫降臨/日向三代
  - 新天地に移動した邇邇芸命は、出雲一族の勢力に負けず、新しい国を作り、配偶者を得て、子孫を残した。
    - 配偶者については、配偶者の親と争いが発生したが、子供達が生まれた。
    - 王位継承争いが発生、弟の火遠理命が継承。兄の火照命は服従し、隼人の祖先となった。
    - 鵜葺草葺不合命が誕生、五瀬命、稲飯命、三毛入野命、伊波礼毘古命の4兄弟誕生
- 出雲国譲り/神武東征に続く



# 天の岩戸/天孫降臨/日向三代 の解釈: 「検証方法」

## • 記紀の解釈を検証する

- 年代は不明。天孫族の地域も、高天原の位置も、須佐之男命:出雲族の地域(九州での)も不明。
- 実際に有ったことならば、遺跡・遺物・伝承などが残るはずだが、検証方法も不明。
- 考古学成果の発表には、個々のものが多く、全体を俯瞰したものが少なく、見晴らしがきかないのが残念。
- 記紀神話をベースにして、考古資料等から歴史として解析した研究を探したが、納得できるものは残念ながら見た記憶が無い。それでは、やってみるしかない。

## • 検証の方法

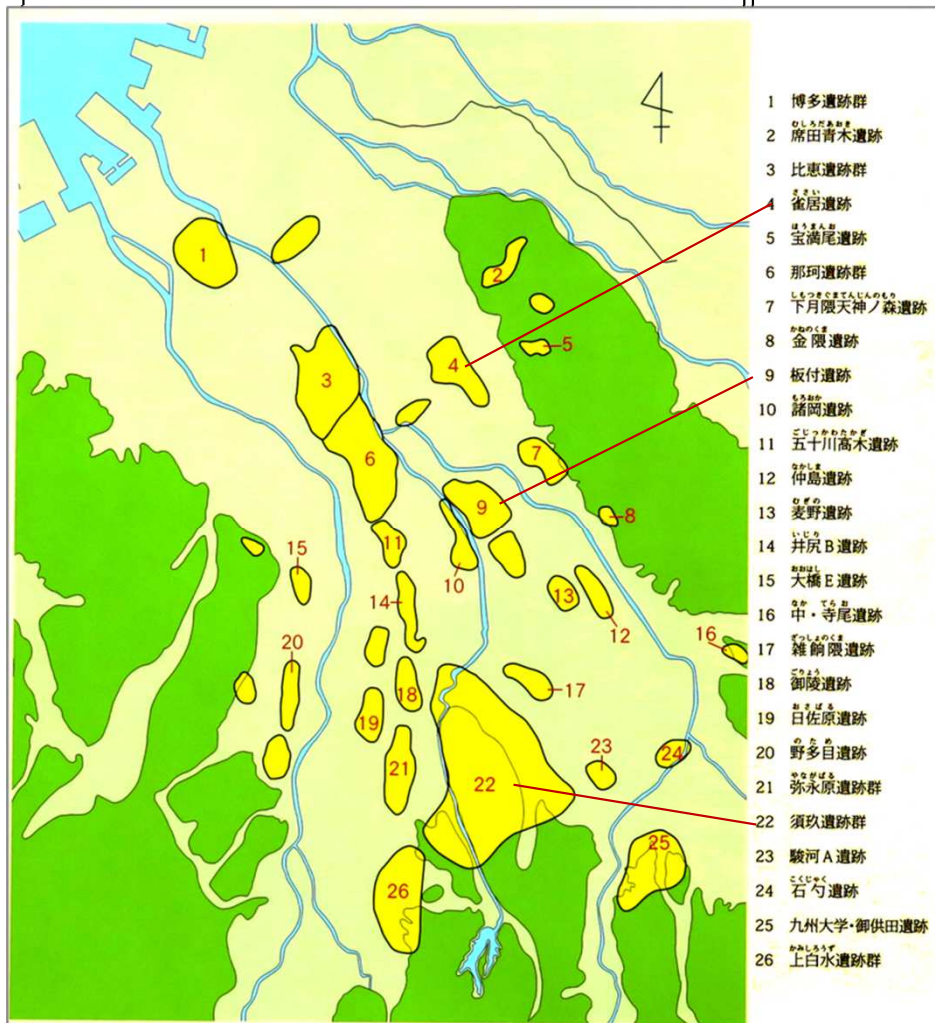
- 王が居たならば、王墓があるはず。
  - 弥生時代の王墓から、時代・地理:場所が判るかも。
  - 中国の史書に記載された王は、記紀に記載された可能性がある。時代が特定可能。
  - 天孫族と須佐之男命/出雲族の区別をつける必要がある。三種の神器が一つの材料。
- 戦争が行われたことは、明確。
  - 戦争の証拠は、戦傷遺跡、高地性集落(山城)、環濠などから。
  - 青銅の祭器とその埋納は、勢力範囲の推定と戦争の証拠となり得る。
- 二つの勢力が争ったならば、生活の基盤の違い、土器の違いが有るはず。
  - 土器の分布や集落・技術の違いが有れば、それは補完材料となる。
- もう一つの検証材料は、魏志倭人伝
  - 倭国大乱の記述有り。
  - 卑弥呼擁立。
  - 大倭を置き、女王國以北を監視・一大率を伊都国に置き諸国を檢察する。諸國は畏憚する。
  - 日本の歴史では有り得ない奇妙な一夫多妻の記述がある。
  - 狗奴国

# 考古資料の記述から ①

福岡市博物館  
企画展示 2010年度  
『**奴国**発展の礎 -クニグニがまだ  
小さかった頃-』  
展示記録から文章を抜粋  
図・地図は別途追加

## 弥生時代の始まりと奴国の始まり

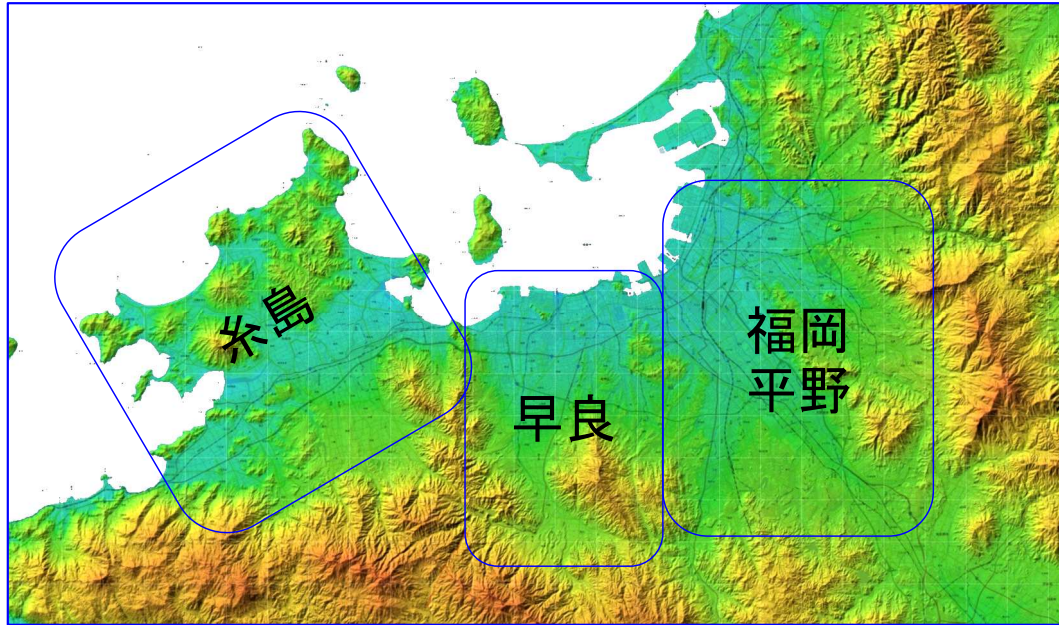
- 後に奴国となる範囲に最初の弥生的な集落として出現したのは、**板付遺跡**や**雀居遺跡**(ささいいせき)など、**那珂川・御笠川**中流域の低い台地の上につくられた集落でした。
- 板付遺跡には、弥生時代の早い段階ですでに環濠や貯蔵穴、人工的な畦(あぜ)や水路を備えた水田など、その後の弥生集落に見られる諸要素がそろっていました。
- 板付遺跡の付近には諸岡遺跡など**弥生時代前期**の集落があり、この地域に小規模な「ムラ」(数軒の住居が集まった集落)が散在していたことがわかっています。
- 土器のような日常用具にとどまらず、当時の埋葬方法にも見られます。土壙墓(どこうぼ)や埋甕(うめがめ)といった縄文時代からの埋葬方法に加え、この時代には朝鮮半島から支石墓(しせきぼ)や石棺墓(せっかんぼ)という新たな埋葬方法が伝わります。
- やがて、甕棺墓(かめかんぼ)が北部九州で独自に発達したこともあり、同じ時代に営まれた墓地の中に様々な形式の墓が並ぶといった状況も見られました。
- 弥生時代前期の後半**になると**奄美**や**沖縄**といった南西諸島産の貝を使用した**貝輪**が北部九州で見られるようになり、**山陰**や**北陸**の**ヒスイ**を使った**玉製品**がもたらされるというように離れた地域の文化が入ってくる。



福岡平野における集落の分布

- 
- 考古学の論文を読むが、読み切れない。博物館の展示などの記述は、地域全体を判り易く記述している。考古学者の節が根拠になっているはずで、素人には、有難い。

## 考古資料の記述から ②



### 早良 吉武高木遺跡の時代

- 弥生時代前期末から中期初頭の北部九州の文化が流動的になったことが、この時期の土器型式からみてとれます。
- 城ノ越式土器 (じょうのこしきどき) という土器型式は、前期の板付式、中期の須玖式 (すぐしき) という長期にわたって安定して存在した土器型式の間において、非常に短期間しか継続しなかった型式です。
- この土器型式が長く続かなかったことは、その土器を製作していた集落や家族の構造がこの時期に急激に変わってしまったことを物語ります。

### 吉武高木遺跡3号木棺墓の遺物出土状況

- この弥生時代前期末から中期初頭の時期に玄界灘沿岸で勢力を持っていたのが早良平野の吉武高木遺跡の被葬者たちでした。
- 吉武高木遺跡3号木棺墓の被葬者は銅剣・銅戈・銅矛の青銅武器、ヒスイ勾玉、そして碧玉製管玉を持ち、近接する他の墓からも武器をはじめとする副葬品が多数出土しました。
- 早良平野のそれぞれのムラは、吉武高木のムラと結びつきながらゆるやかな関係を保っていたのでしょう。
- 早良平野のムラは、次の時代になると奴国のムラに比べ相対的にその力を落としていきます。

## ・ 奴国の出現と発展

- 奴国の範囲では、吉武高木のムラが全盛期を迎えた弥生中期前半には、青銅器などは多くありませんでした。
  - しかし弥生時代中期後半以降は、ガラスや青銅器の鑄造関連の遺物を中心に新たな文化や技術を積極的に取り入れました。
- 同時期に比恵・那珂遺跡では集落のあり方が大きく変わりました。
  - いくつかの集落を再構成し、台地上に都市計画のような大溝が掘られ、中期の後半になると大型の建物も出現します。
- さらにこの時代になると、平野の南側にある須玖岡本遺跡のようなムラも含めた広い範囲でのまとまりが成立したと考えられます。
- 弥生時代前期に須玖丘陵の各所に分散していた小さなムラは弥生中期になると急速に拡大し、奴国全体の中心になっていきました。
  - 須玖岡本遺跡の甕棺墓の被葬者は前漢の銅鏡を30面以上持っていて、奴国の王墓だと考えられています。
- 奴国は朝鮮半島をこえて中国と直接交易を行うことができる力を持つようになり、中国の鏡や武器、そして金印「漢委奴国王」を手にする北部九州の盟主になったのです。

# 考古資料の記述から ④ 考古資料から歴史把握が可能

福岡市博物館 企画展示 2010年度  
『奴国発展の礎 -クニグニがまだ小さかった頃-』  
展示記録から

		早良平野	福岡平野(奴国)
弥生前期	前半		板付遺跡や雀居遺跡 水田・環濠集落 小規模なムラ
	後半		沖縄・奄美から貝輪 山陰・北陸からヒスイ 板付け式土器
弥生前期末から 中期初頭		吉武高木遺跡3号墓	
		銅剣・勾玉の副葬	
		極短期間の間だけ「城ノ越式土器」	
弥生中期	前半	須玖式 土器	
		吉武高木のムラが全盛期を迎えた	比恵・那珂遺跡 大変化あり。 都市計画大溝
	後半以降	ガラス・青銅製鋳物など新文化・技術	
			須玖岡本遺跡 広範囲でまとめ 奴国の中心に 甕棺墓銅鏡30面:王墓
		中国の漢に朝献し、金印を手にした。	

福岡市博物館の展示記録を読み、左図のような時期/地域毎の状況をまとめることが出来る。

- 弥生前期
  - 福岡平野に奴国が有り、弥生時代前期から水田稲作を始め、発展し、前期の後半には、南海や北陸から装飾品を輸入する余裕が出るほど、発展した。
- 早良平野には、王墓が生まれた。
- 弥生中期前半
  - 吉武高木遺跡が全盛期を迎え、
- 弥生中期後半
  - ガラス・青銅器鋳物を生産。
  - 早良から奴国へ勢力の中心が移る。
  - 須玖岡本遺跡、広範囲にまとめ奴国の中心地となる。
  - 須玖岡本の甕棺墓は王墓
  - 中国に朝献
- **異変** →これが何を意味するのだろうか？
  - 土器が板付け式から須玖式に移る間の時期に、**短期間だけ別の形式「城ノ越式土器」**になる。
  - 須玖岡本の北側の比恵・那珂遺跡に大変化が有り、都市計画が実施された。

# 土器から判る断片的な情報

- 城ノ越式土器は、城ノ越遺跡で発掘された弥生中期初頭の指標土器
  - 城ノ越遺跡の所在地は遠賀川の下流域。
  - 城ノ越式土器は、遠賀川流域由来か？
- 「朝鮮半島出土弥生系土器から復元する日韓交渉」石丸あゆみ著の中で、気になったこと。
  - 靑島遺跡では、最も多くの弥生土器が流入する。  
須玖II式の袋状口縁壺などの糸島地域特有の土器が多く原ノ辻にもたらされることから、原ノ辻を中継地とした交易に糸島地域の集団が深く関わっていると考えられる。
  - 鉄鉦山にある蔚山達川遺跡出土の壺は、須玖II式の北部九州からの搬入品。鉄器生産に直接関係する遺跡から弥生系土器が出土した意味は大きい。
    - 韓国との交易に携わったのは、糸島地域で、土器をもたらした鉄鉦山からの鉄・鉄器を輸入したと考えられる。
      - その時期は須玖II式の時代
- 以上は、土器から判る、断片的な情報。



## 城ノ越貝塚

遠賀川の上流附近にある城ノ越貝塚遺跡は弥生時代の貝塚を主体としています。貝塚とは今でいうゴミ捨て場のようなもので、捨てられていたものから、当時の人々の生活を知ることができます。

城ノ越遺跡からはヤマトシジミを主に多量の淡水産貝類、動物骨が出土されました。また、多種の土器や石鏡、石斧、石剣、砥石、石包丁も出土しました。層の最下層の土器は弥生時代前期末のものと位置づけられており、これに続く弥生時代中期初頭の土器は「城ノ越式土器」と命名されることになりました。「城ノ越式土器」は北部九州の土器が作られた年代を知ることでの重要な標識となっています。

遺物の分布範囲は約4000平方メートルにわたり、丘陵上には集落があったであろうと推定されています。

表6 弥生土器と粘土帯土器の併行関係に関する研究成果

弥生時代	土器型式	後藤直 1979	片岡宏二 1990	武末純一 2003	白井克也 2001	安在皓 徐始男 1990	申敬 鄭澄元 1987	安在皓 洪潜植 1990	李在賢 2003	李昌熙 2004
前期	初頭	夜白IIb式 板付I式	松菊里式 粘土帯土器	松菊里式	円形 粘土帯土器	円形 粘土帯土器	円形 粘土帯土器	円形 粘土帯土器	円形 粘土帯土器	円形 粘土帯土器
	中頃	板付IIa式		松菊里式						
	後半	板付IIb式		松菊里式						
	末	板付IIc式		円形 粘土帯土器						
中期	初頭	城ノ越式	円形 粘土帯土器	勒島式	勒島式	勒島式	勒島式	勒島式	勒島式	勒島式
	前半	須玖I式	勒島式	勒島式	勒島式	勒島式	勒島式	勒島式	勒島式	勒島式
後期	後半	須玖II式	勒島式	瓦質土器	瓦質土器	瓦質土器	瓦質土器	瓦質土器	瓦質土器	瓦質土器
	前半	高三瀧式	瓦質土器							
	後半	下大隈式	軟質土器							
	末	西新式	軟質土器							

日本

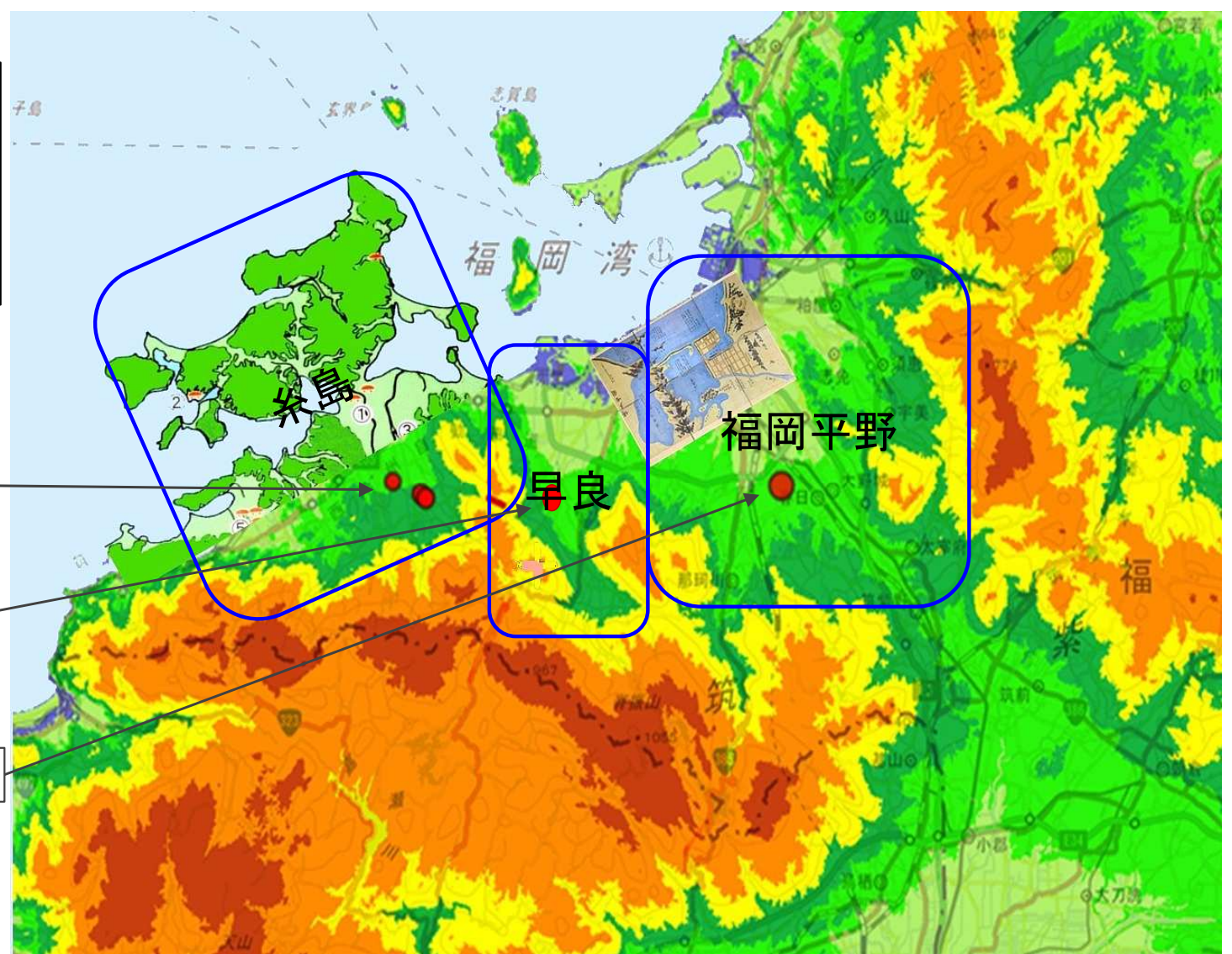
韓国

王墓・甕棺・三種の神器など中心となる地域

平原遺跡  
井原鍵溝遺跡  
三雲南小路遺跡

吉武高木遺跡

須玖岡本遺跡



- 弥生時代の王墓が出土する地域は
  - 早良平野
  - 福岡平野
  - 平原平野
    - 王墓に準じる墓が出土する地域は、外にもあるが、王墓はこの3地域
    - 王に関わる神話の舞台は、この地域と考えられる。

## 北九州の主要地区と王墓

副葬品として、剣・勾玉・鏡が出土する地域

時代		唐津	糸島前原	早良	福岡平野	筑後平野	遠賀川立岩
弥生早期		水田稲作支石墓	水田稲作支石墓	水田稲作支石墓	水田稲作	水田無し	水田無し
		夜臼式	夜臼式	夜臼式	夜臼式		
弥生	前期	初期に棺専用のカメを開発	遺跡数の増加無し 甕棺墓に副葬品皆無	板付I式土器環濠集落	遺跡数急激な増加 甕棺墓	甕棺出土 有柄式磨製石剣出土	下流域 水田
		支石墓に複数の甕棺		集落の拡大拠点集落発生			
	中期	宇木汲田青銅器を副葬有力者墓		木棺墓王墓	甕棺墓から銅剣・銅戈	鉄器出土	スダレ戦争遺跡
		後期には、有力者の墓が消滅	三雲南小路王墓	榎渡遺跡(王墓ではない)支配層の墳墓	須玖岡本王墓	鉄器普及	夫婦岩甕棺墓
			井原鎌溝王墓		甕棺墓急速に減少		立岩・堀田王墓
	後期	桜馬場に王墓	甕棺墓存続	中期集落は継承するが遺構・遺物は減少	墓の数激減 激動の時代	住宅跡の覆土中から多量の鉄器 墳墓から鏡・青銅器・鉄器	
王墓は出ないがその後も桜馬場が有力集団		平原王墓その後王墓無し	後漢鏡副葬の墓多数 王墓無し				



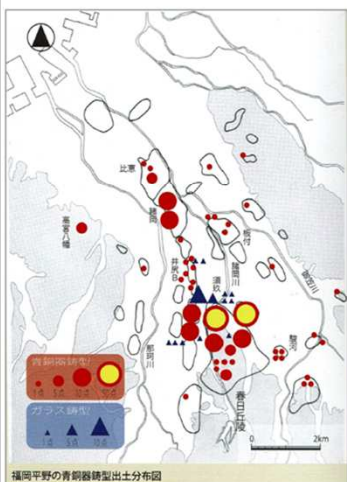
# 王墓 ① 早良平野

早良平野の吉武高木遺跡で「最古の王墓」 福岡市博物館のHPより

- 吉武高木遺跡では弥生時代前期末～中期後半の甕棺墓34基、木棺墓4基、土墳墓13基が発見されました。
  - 成人の墓には標石をもつものもあります。
  - ここからは甕棺墓8基と木棺墓4基から細形銅剣9口、細形銅戈1口、細形銅矛1口、多鈕細文鏡1面、銅釧(どうくしろ)2個、ヒスイ製の勾玉、碧玉製の管玉などが出土しました。
  - 特に、3号木棺墓には細形銅剣2口、細形銅矛1口、細形銅戈1口、多鈕細文鏡1面、ヒスイ製勾玉、碧玉製管玉類が納められ、この墓地の中心的な墓と考えられています。
- 三種の神器・甕棺が天孫族の王墓であることを示す。



# 王墓 ② 福岡平野 須玖岡本の王墓



王墓の復元模型



- 須玖遺跡群北部の青銅器工房跡
- ① 須玖唐梨遺跡 (鉄器工房跡)
  - ② 須玖五反田遺跡 (ガラス工房跡)
  - ③ 須玖永田A遺跡 (青銅器工房跡)
  - ④ 須玖黒田遺跡 (青銅器工房跡)
  - ⑤ 須玖タカウタ遺跡 (青銅器工房跡)
  - ⑥ 須玖坂本B遺跡 (青銅器工房跡)
  - ⑦ 須玖岡本遺跡坂本地区 (青銅器工房跡)
  - ⑧ 須玖尾花町遺跡 (青銅器工房跡)

須玖岡本王墓出土地

# 王墓③ 前原・平原地域

- 三雲南小路王墓・井原鍵溝王墓
  - 平原王墓に先行する王墓
  - 三種の神器や充実した副葬品
  - 共に甕棺墓
- 平原王墓
  - 弥生時代後期・古墳時代直前の時代に
  - 三種の神器が揃い
  - 飛びぬけて、充実した副葬品が出土。
  - 日本最大の大型銅鏡 5枚は、圧巻。



23-2 空からみた三雲南小路王墓 (西から) 東西32m、南北31mの規模の墳丘を周縁が囲む。西縁は南西の角で階段状に凹凸し、墳丘と外部とをつなぐ。

伊都国	三雲南小路王墓	57枚
井原鍵溝王墓	21枚	
平原王墓	40枚	
奴国	須玖岡本王墓	30枚
末盧国	桜馬場遺跡	2枚
	立岩畑田10号墓	6枚
	東小田峯10号墓	2枚
凡例	● 10枚 ● 5枚 ● 1枚	

23-1 銅鏡の出土枚数比較図  
三雲南小路王墓では1号、2号甕棺合せて57枚に上る大量の銅鏡が出土した。これほどの鏡の大量副葬は弥生時代はもとより、古墳時代に入ってから突出しており、ほとんど例がない。



# 平原王墓の出土品

- 古墳時代以前の墳墓で、大和朝廷の三種の神器と同じに太刀・鏡・勾玉が出土。鏡は、46.5cmの巨大なもの、八咫鏡(やたのかがみ)のサイズに該当。



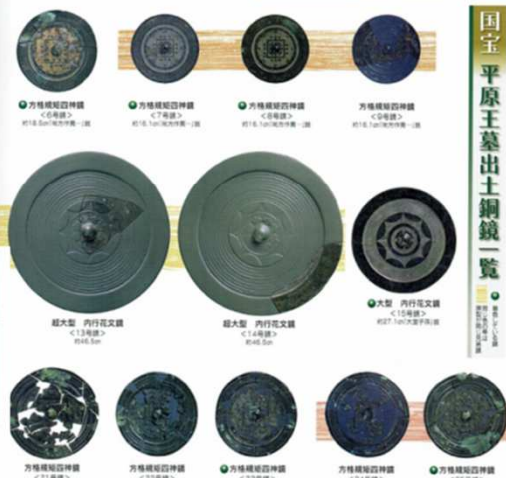
伊都国歴史博物館常設展示図録より4点



⑦素環頭大刀 全長 80.2 cm。ほとんど反りを持たず、直線状をなす。



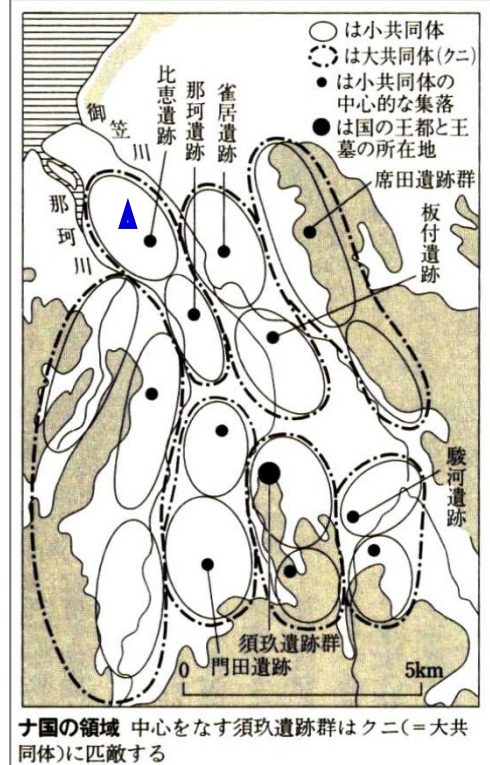
糸島新聞社 2006年5月 記事より



国宝 平原王墓出土銅鏡 覧

# 須玖遺跡群について 寺沢薫氏の説明

- 王墓が出土した須玖岡本遺跡を中心に遺跡が密集する。この遺跡群は『弥生最大のテクノポリス』という名誉ある称号を冠されている。』青銅器や鉄器、ガラス製品が生産されていた。
- ある時期になると、様相が一変し、かつてのテクノポリスや王墓は影を潜めた。
  - 後期前葉には北に広がる低地に中心を移し、須玖永田遺跡や須玖黒田遺跡では一辺七十メートルもの方形区画を誕生させるまでになった。また、須玖唐梨遺跡と五反田遺跡では二百メートルにわたって直線的な溝が復元され、方格に地割りされた都市的な集落も想定されている。
  - しかし三世紀になると、それも次第に衰退を始めた。
- ✓ 須玖遺跡群は、最大のテクノポリスで、ナ国の首都であったが、ある時期から、凋落し、都市計画に基づいた集落に置き換わった。
- ✓ これは、戦争の結果、奴国が敗北し、占領され、その技術を戦勝国が使用し、新しい生産基地を作成したものと、解釈できる。



## 須玖遺跡群と「ナ」国王墓 「王権誕生」158P～

一方、ナ国の王墓はどうだろう。ナ国の中心は福岡県春日市須玖遺跡群だ。春日丘陵北半を中心とする南北約二キロ、東西一、二キロの範囲にある。丘の上には中期から後期にかけての五十カ所もの集落や墓地が所狭しと密集している。近畿でこの広さであれば、そっくり小共同体の規模だ。

だが、遺跡の密度や内容からすると大共同体(クニ)にも匹敵する。須玖遺跡群自体が都市的景観をもったクニそのものなのだ。しかもここでは中期後半以来、数々のムラで青銅器や鉄器、ガラス製品が生産されていた。

青銅器の鋳型は福岡平野のじつに七割以上がここから出土していて、考古学者から弥生最大のテクノポリス』という名誉ある称号を冠されている。

こうした先端技術集団を抱え、金属器などの集中的生産を基盤として、中期末には須玖岡本遺跡に王墓が出現した。一八九九(明治三十二年)、巨大な板石の下の甕棺から前漢鏡約三十面、中細形鋼矛五、中細形銅戈一、多樋式銅剣一、ガラス製璧二、ガラス製勾玉一、ガラス製管玉十二が出土した。大きな方形の墳丘が存在した可能性があるという。

## 三世紀の奴国 「王権誕生」276P～

一方奴国では、三世紀になると春日丘陵上の環境をめぐる集落群が次々に解体し、かつてのテクノポリスや王墓は影を潜めてしまった。旧ナ国の王都だった須玖遺跡群も、後期前葉には北に広がる低地に中心を移し、須玖永田遺跡や須玖黒田遺跡では一辺七十メートルもの方形区画を誕生させるまでになった。また、須玖唐梨遺跡と五反田遺跡では二百メートルにわたって直線的な溝が復元され、方格に地割りされた都市的な集落も想定されている。しかし、それも次第に衰退を始めた。

# 王墓 / 甕棺墓

- 王墓の条件は、豪華な副葬品を持つこと。
  - 早良の**最古の王墓の決め手**は、三種の神器と同じ、**剣・鏡・勾玉の出土**。
    - **三種の神器は、天孫一族の王の印**
    - 神話上で対抗する出雲一族の王墓は、この時期の考古資料では特定できていない。
      - 墳墓が発生し、四隅突出墓・帆立貝型古墳・方墳・円墳・前方後方墳・前方後円墳が有る。
        - 出雲族の王墓は、四隅突出墓と見られるが、北九州には存在しない。
  - 三種の神器を副葬した墓を天孫一族の王墓とすると、
    - その地域の墓制の特徴は、
      - 外の地域には無い甕棺墓制
      - 副葬品が充実。青銅製武器・鏡・勾玉/管玉などの副葬品が有る。
    - **甕棺と充実した副葬品が有る地域は、天孫の地域と見る。**
- 
- 甕棺の分布図を見ると、天孫族の動静が窺える。
    - 甕棺について時代毎にまとめた資料がネット上で検索できる。
      - 著者は歴博の藤尾慎一郎氏と思われる。URLは下記
      - [https://wi12000.folder.jp/forGmap/html/kamekan\\_hen.html](https://wi12000.folder.jp/forGmap/html/kamekan_hen.html)
    - 内容は、藤尾慎一郎著「九州の甕棺-弥生時代甕棺墓の分布とその変遷-」(1988年10月31日稿了)の添付資料と同一なものが多い。
  - 甕棺の時代別分布図から天孫族の動静を次頁以降に見る

# 甕棺の時期別・分布図の前提条件

甕棺の時期大別の指標

橋口編年	KI			KII			KIII			KIV			KV									
	a	b	c	a	b	c	a	b	c	a	b	c	a	b	c	a	b	c	d	e	f	
弥生時代	前期						中期						後期									
藤尾編年 (1988-)以降	I		II			III			IV			V										
	刻目突帯文	板付I 伯玄社	金海 城ノ越	汲田			須久			立岩(古)			立岩(新)			桜馬場	三津永田	日佐原				
弥生時代	前期			中期						後期												
製作技法	壺の製作技法			甕棺独自の製作技法の成立			焼成法の進歩 器面調整技法の確立															
				器高80cm			器高1m															
系列	大型棺									器高低下												
	中型棺									器高増大												
分布	唐津・早良 佐賀・神埼 福岡・春日へ			南筑後・熊本 大村へ			嘉穂			熊本で衰退 福岡で衰退 佐賀で衰退			残存甕棺壺 日田・糸島で 特殊に展開									
副葬品				漢以前の 半島系青銅器			半島系・前漢 九州産青銅器 鉄製武器			王莽・後漢鎮 楽浪漢壺系 九州産青銅器												

地域毎の時期別基数

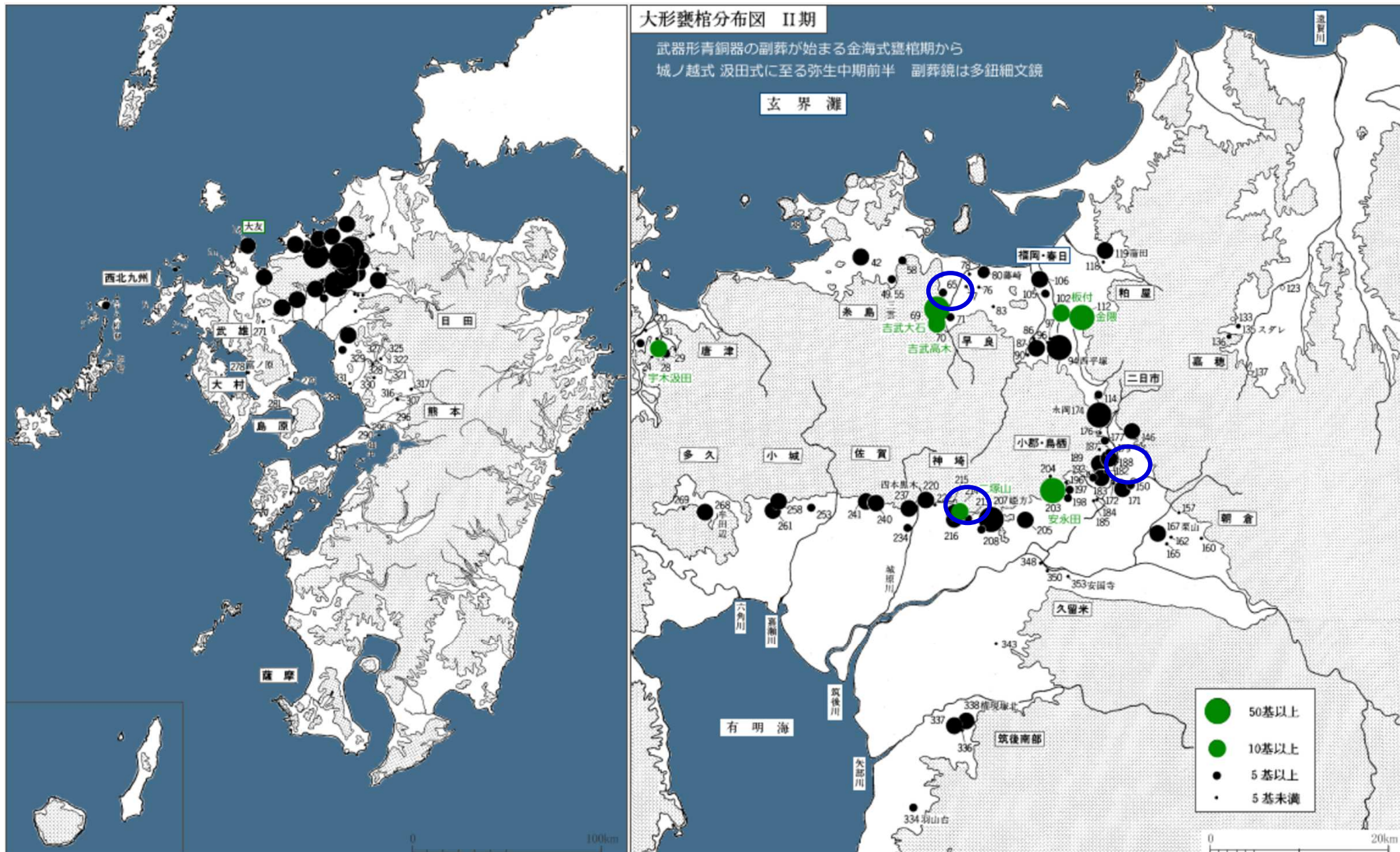
地域	I	II	III	IV	V	大形棺計	時期不明	補正大形棺計	甕棺総基数
西北九州	27	7	1	1	2	38	74	75	158
唐津	21	58	48	15	2	144	142	215	331
糸島	65	30	19	10	3	127	6	130	215
早良	11	59	57	10	9	146	1,064	708	1,586
福岡・春日	36	14	327	27	2	406	878	845	1,769
粕屋	0	1	26	1	3	31	32	47	77
嘉穂	0	2	31	3	0	36	210	141	293
二日市	35	8	30	58	0	131	106	184	241
朝倉	2	60	152	52	3	269	538	538	900
小郡・鳥栖	29	111	86	151	2	379	1,964	1,361	2,522
神埼	19	155	144	33	0	351	2,548	1,625	2,951
佐賀	38	92	37	1	6	174	230	289	454
小城	4	2	3	5	0	14	384	206	464
多久	0	37	93	2	0	132	40	152	233
武雄	3	2	3	4	0	12	0	12	15
大村	0	1	7	7	0	15	0	15	30
島原	5	1	5	5	0	16	40	36	65
熊本	29	8	27	0	0	64	84	106	175
筑後南部	9	50	8	3	24	94	166	177	297
久留米	1	20	38	2	4	65	46	88	157
日田	0	0	0	3	3	6	16	14	19
鹿児島	0	0	3	0	0	3	0	3	3
合計	334	718	1,145	393	63	2,653	8,568	6,967	12,955

- 1988年の段階の資料で、この中には、含まれていない甕棺が計4500件あると、断り書き。

含まれないのは:

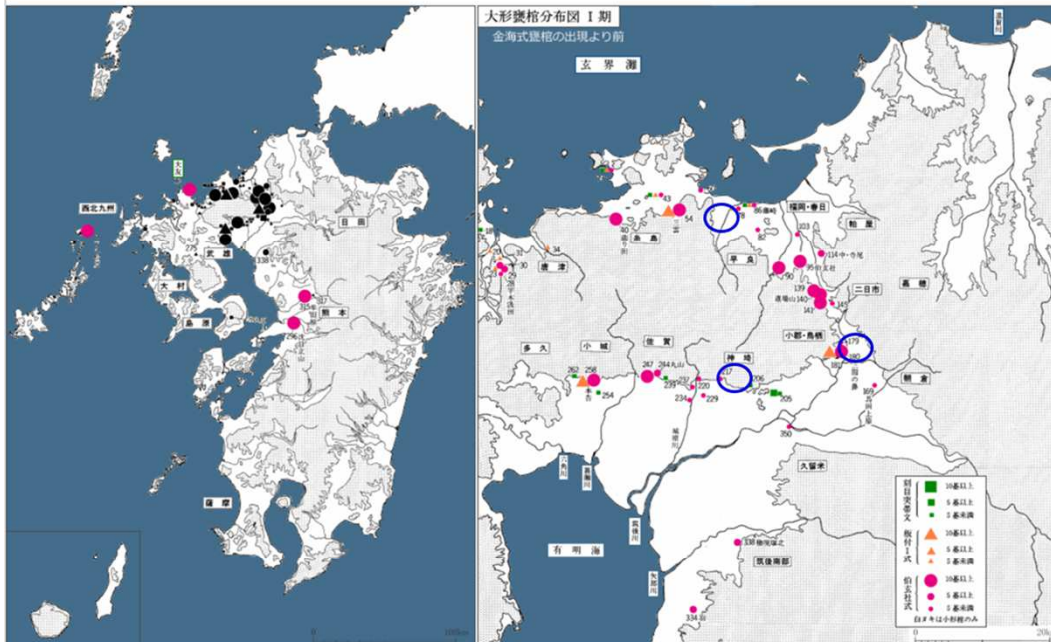
- 筑紫野市の隈・西小田:1800件、神崎郡吉野ヶ里:1500件、福岡市の吉武遺跡:1200件

# II 期 (金海/城ノ越/汲田)



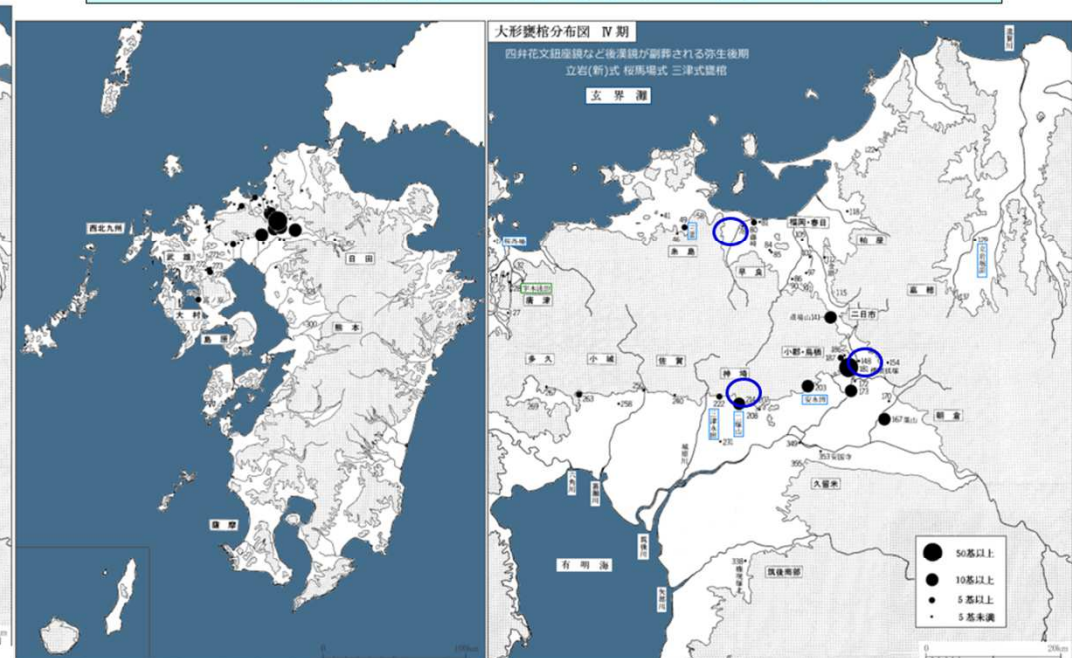
- 中心は、背振り山地周辺で変わらず。糸島減少。早良増大。 ☆ 弥生前期と中期の境目の時期の城ノ越式土器。
- 離れた地域の熊本県と五島・鳴子付近に甕棺が残る。

## I 期 (刻目突帯文/板付I/伯玄社)



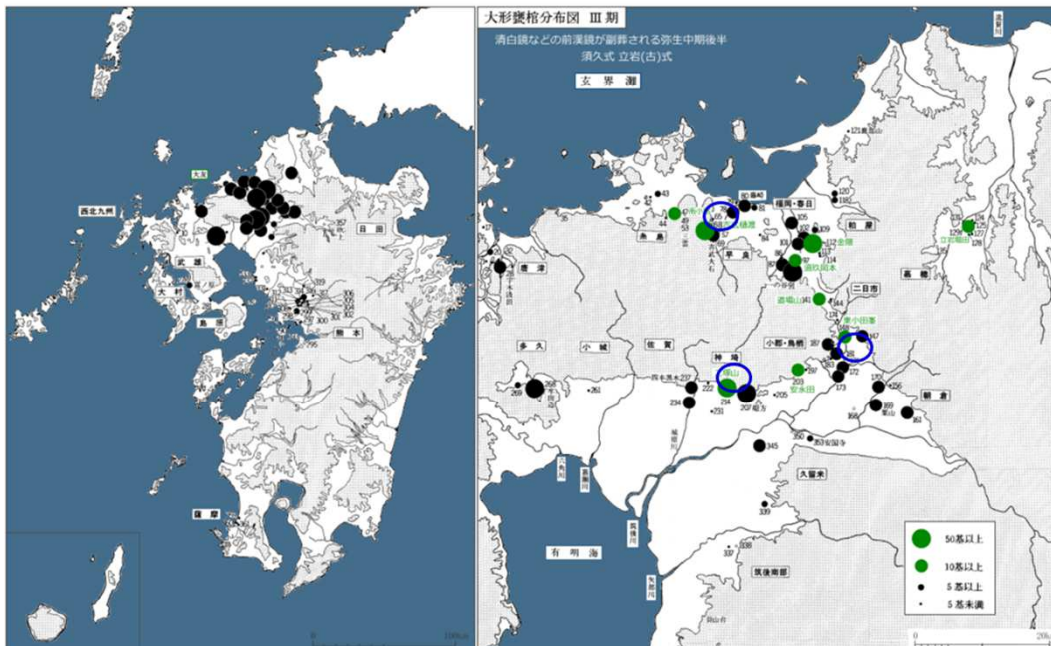
- 中心は背振り山地周辺地域
- 離れた地域の熊本県と五島・鳴子付近に注目。
- 刻目突帯文時代の甕棺としたものは、西北縄文人の子供を埋葬用の土器棺。

## IV 期 (立石(新)式/桜馬場式/三津永田式)



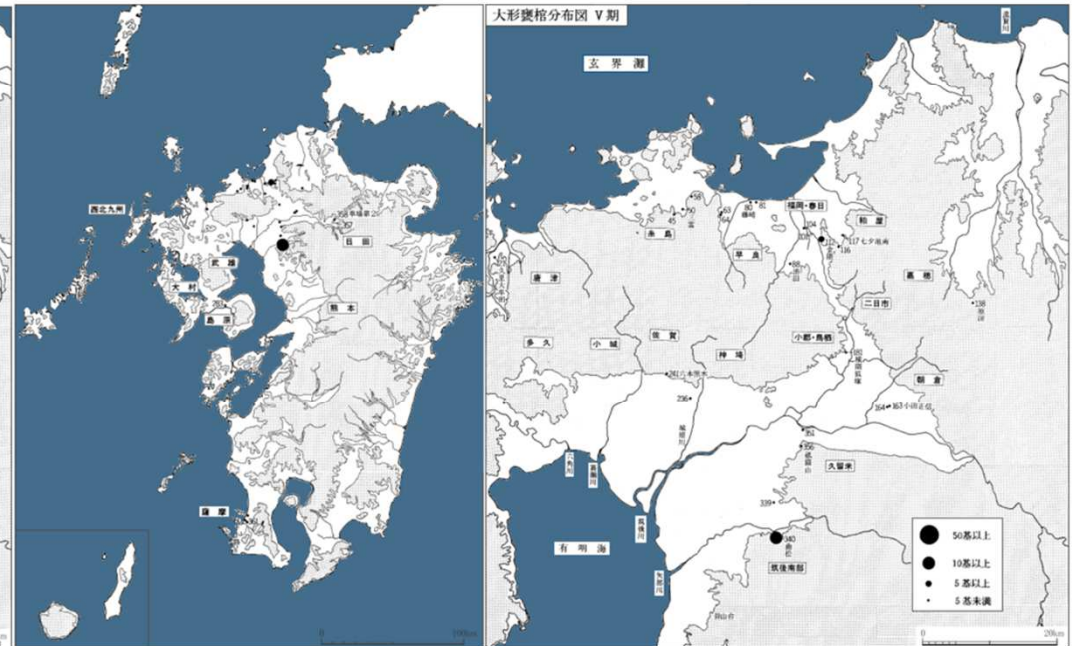
- 甕棺は一気に減少。太宰府の南側の小郡・鳥栖を中心に残存。
- 熊本は皆無に。遠賀川流域もほぼ皆無に。

## III 期 (須玖/立石(古))



- 遠賀川流域の嘉穂地区(飯塚立岩遺跡)に突然甕棺墓が現れる。鏡・剣を副葬した10号甕棺は二日市地域産の甕棺
- 熊本県には、相変わらず甕棺が、分散して存在。

## V 期 (日佐原)

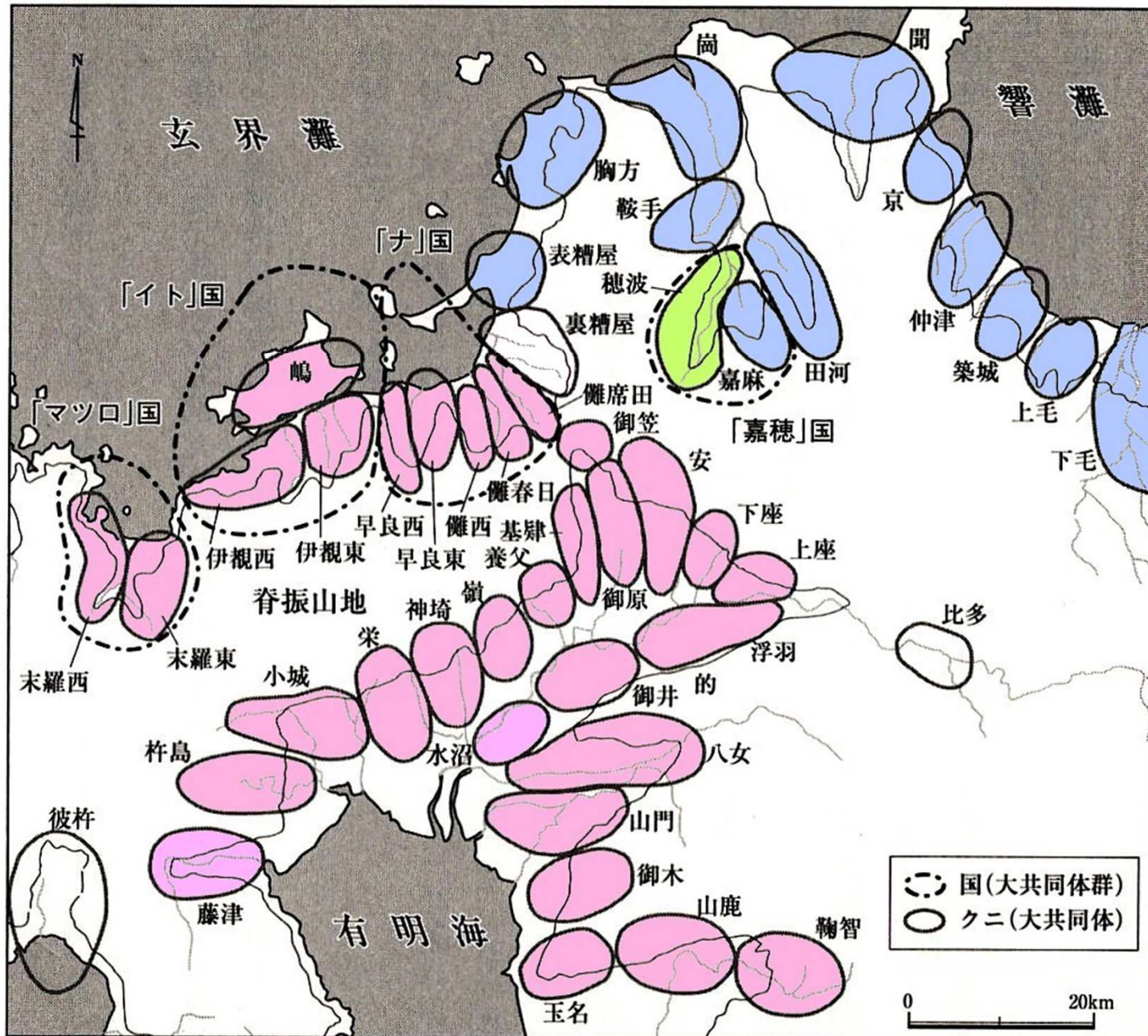


- 祇園山古墳に3基、その南の八女市の曲松遺跡に21基。共に最終期の日佐原式甕棺。
- 曲松古墳群の南には熊本県との県境。時期によっては熊本・菊池に属した。その東南3km流には、たたら製鉄・铸造遺跡あり。

# 甕棺の分布へのコメント

- 藤尾慎一郎著「九州の甕棺-弥生時代甕棺墓の分布とその変遷-」で注目する記述がある。
  1. III期に甕棺墓の規模、副葬品の量と質において頂点をきわめた福岡・春日、神埼、朝倉では、甕棺墓自体が衰退し、なかでも福岡・春日ではその傾向が強く、(中略)一斉に他の墓制へ転換する。
  2. 嘉穂では立岩遺跡周辺に大形棺が出現する。
    - 立岩遺跡の10号甕棺は二日市地域の道場山型とされ、(中略)大形棺が持ち込まれている。
  3. 熊本における北部九州系大形棺と在地甕棺の関係、(中略)島原や薩摩における熊本系中形棺の存在など検討すべき課題は多い。
- 気が付いた点。
  - 甕棺は、三種の神器の剣・鏡・勾玉を副葬する王墓も使用し、その王墓と同地区の墓に甕棺が多く使用されていることから、甕棺は天孫族の墓制と推定する。
  - I期/II期/III期の分布図から、天孫一族は、
    1. 背振山地の南・東・北・北西に居住していたと推定。(神埼・吉野ヶ里・隈・西小田・春日・須玖・
    2. 長崎県の半島/五島列島や熊本県(菊池川流域/白川流域)にも初期から天孫一族が居た。
  - 北部九州の遠賀川流域は、初期のI期/II期には甕棺は出土せず、天孫一族とは別の、「敵対した一族」の居住地と思われる。
  - 遠賀川流域に突然出たIII期の甕棺は、「敵対した一族」の中に、王族が飛び込んできた様相に見える。
    - その甕棺自体は、天孫族の二日市地域から運ばれた。
  - III期に頂点を極めた後に、福岡・春日＝須玖(岡本など)の地域は、「敵対した一族」に占拠され、墓制も変わったものと考えられる。
  - 初期から薩摩・熊本に天孫族が居たことと、薩摩の甕棺は熊本から運ばれたこと。
    - III期に熊本に北部九州の大型甕棺運ばれたことに、注目する。
  - 甕棺の終焉期のV期に、祇園山古墳に3基、その南側の曲松古墳に、天孫一族の甕棺が出土することに注目。

# 天孫族(天孫族)の集落(クニ)の分布(初期状態)



- 甕棺の時期別分布図から、天孫族の分布を判断した。
- 赤系で着色した部分は天孫族
- 青系で着色した部分は出雲族(須佐之男命)

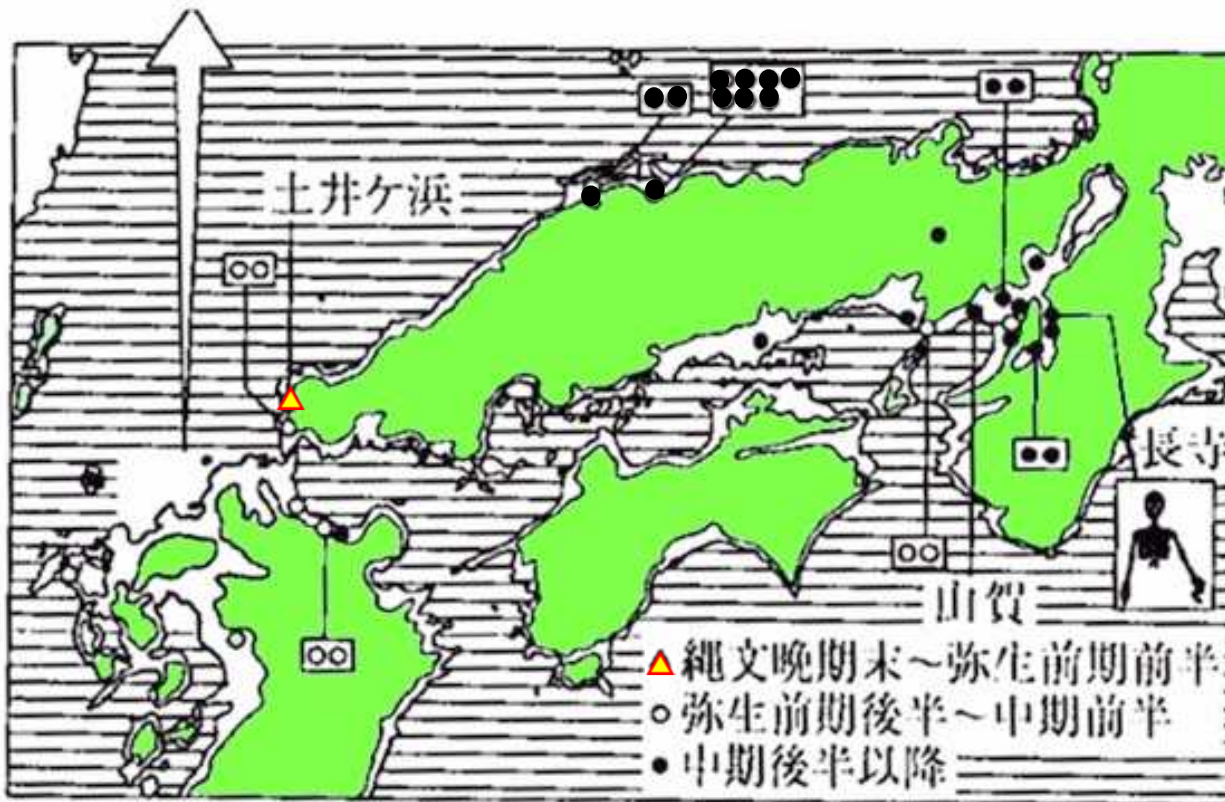
須佐之男命の  
初期の九州での  
勢力分布が  
推測できた

図10 紀元前後の北部九州の部族的国家群 (寺沢、2018年より)

彩色は丸地



# 戦争遺跡



**戦争犠牲者の分布** 縄文晩期末から弥生中期後半。▲、○、●は全身を、絵に示したものはその部分を発掘（『倭国乱る』国立歴史民俗博物館編〔朝日新聞社、1996年〕を参考）

寺澤薫著「王権誕生」より 土井ガ浜と青谷上寺地は丸地が時期を変更

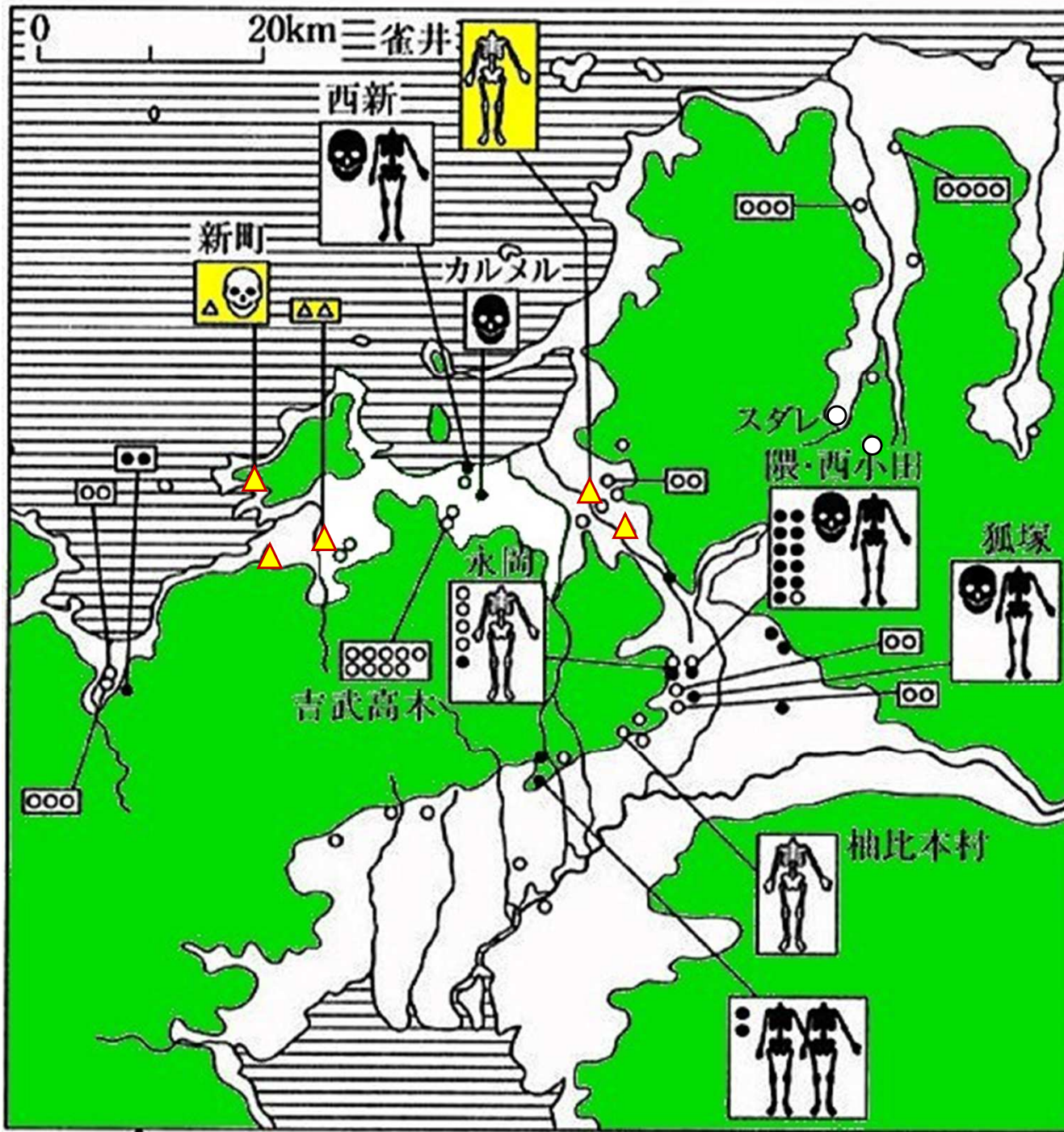
戦争遺跡は、主に北九州と出雲地方・畿内・長野県に分布する。北九州以外の地域は、北九州の争乱が収まった後の時代のもの

- その受傷人骨は、勝者側のものか？ それとも敗者側のものか？
- 戦場に残された敗者の遺骨は、消滅して残らない。(酸性土壌のため)
- 勝者側は、戦死・負傷した兵士を、故郷に連れ戻す。埋葬され残る。
- **戦傷人骨の遺跡は、勝利者の側のもの。**(特異な条件でのみ敗者側も残る)

寺 沢 案						
実年代	時代	時期	近畿編年	北九州編年		
500	縄文	晩期後半(突帯文土器)	滋賀里Ⅳ式	山ノ寺式(曲り田式)		
前5世紀			(口酒井)	1		
400			船橋式	夜臼式		
前4世紀				2		
300	弥生	前期	長原式	板付Ⅰ式		
前3世紀			1	1		
200			第Ⅰ様式	板付Ⅱ式		
前2世紀			2	2		
100			3	3		
前1世紀			4	3		
B. C.			中期	城ノ越式	1	
A. D.				第Ⅱ様式	2	
1世紀				1	2	
100				2	3	
2世紀			後期	第Ⅲ様式	須玖式	4
200					1	5
3世紀	2	1				
300	3	2				
4世紀	4	3				
400	0	4				
	(初頭)前期	第Ⅳ様式	高三瀧式	1		
			1	2		
			2	3		
			3	4		
	古墳	第Ⅴ様式	下大隅式	3		
			1	4		
			2	5		
			3			
	(初頭)前期	庄内式	西新式			
			0	Ia		
			1	Ib		
			2	Ⅱa		
	布留式	布留式	Ⅱb			
			3	Ⅲa		
			4			

(須恵器)

# 戦傷遺跡遺跡(寺沢薫著「王権誕生」の図より、着色・修正)



寺沢薫著「王権誕生」中の戦争犠牲者の分布の北九州の図

- ▲: 縄文晩期末～弥生前期前半
- : 弥生前期後半～中期前半
- : 中期後半以降

▲の弥生前期前半については、初回渡来民(西北九州縄文人)と2次弥生渡来民の戦い。

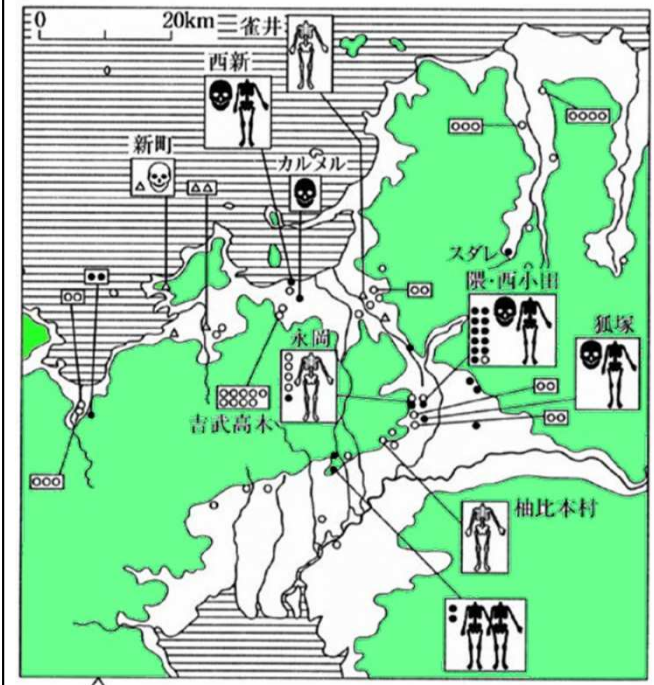
天孫族の神話に関わるのは、

- : 弥生前期後半～中期前半
- : 中期後半以降

遠賀川流域のスダレは、原図では●とされていたが、原資料を確認し○と修正。

# 戦傷者は、戦争の敗者か？ 勝者か？

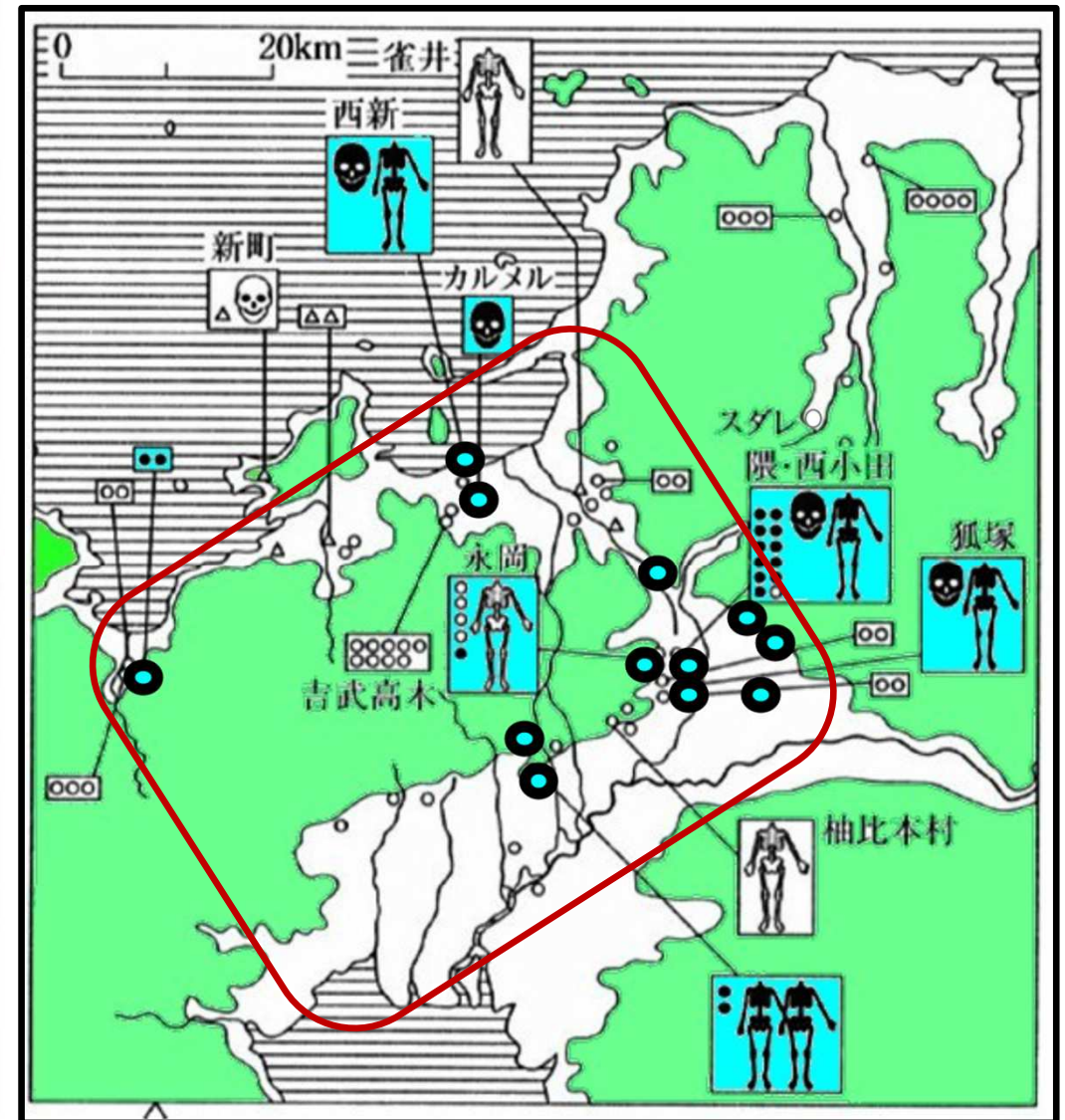
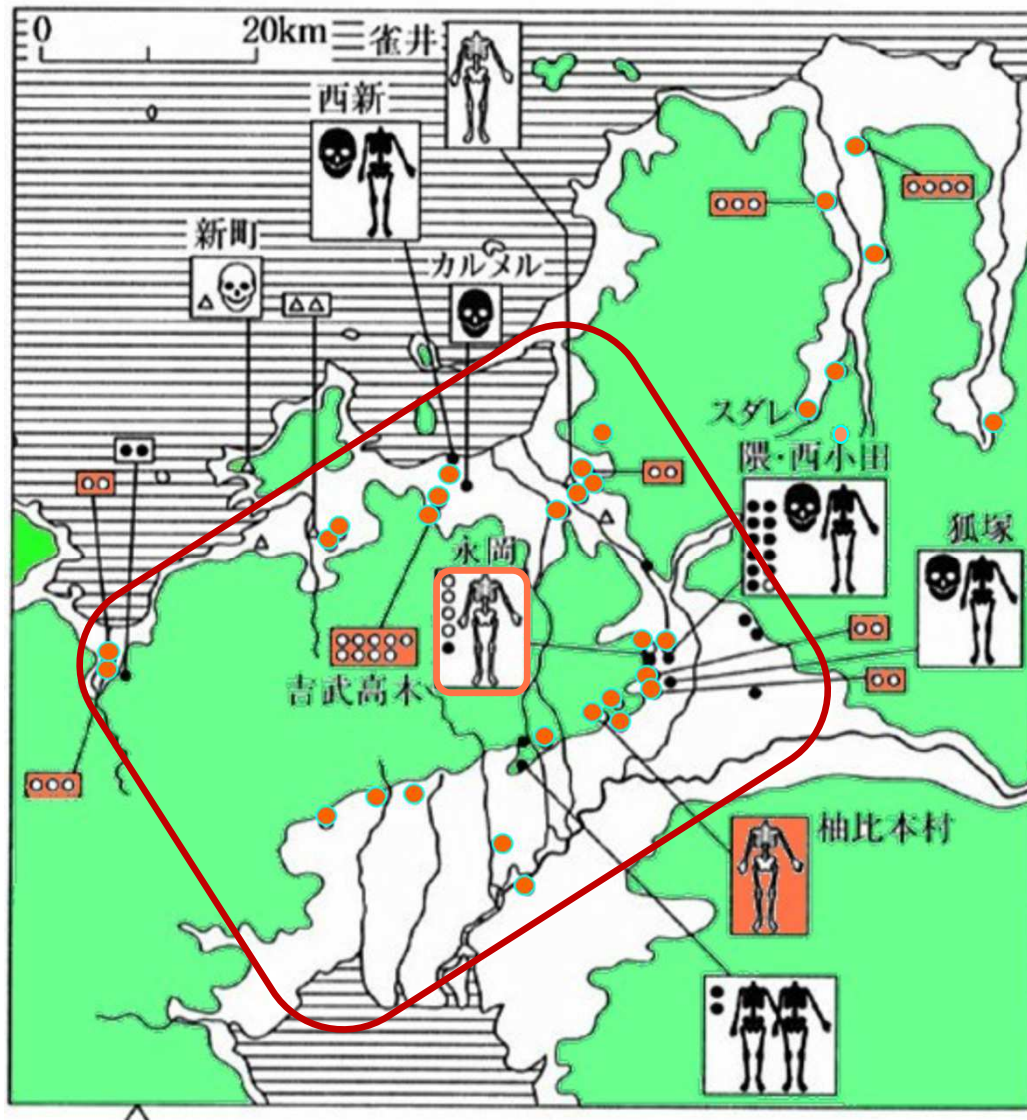
- 寺沢薫氏は戦争犠牲者を、戦争敗者としている。しかし、
- 日本の殆どの地域では、
  - 土壌が酸性で、土中に埋められた骨は、消滅して、残らない。
  - 甕、壺、石棺など良い条件で古い遺骨が残る。
  - 例外
    - 低温・水中で保存され、受傷人骨が残る。→青谷上寺地遺跡
    - 貝殻が多い砂地に埋葬された場合 →土井ガ浜遺跡
- 戦場で負傷・戦死した者を検討する。
  - 勝利者の側の戦死者・重傷者は、故地に戻り、埋葬される。
    - 甕棺・石棺に埋葬されれば残る。
    - 土葬の場合残らない。
  - 敗者側の戦死者は、日本の酸性土壌に放置され、土に戻り、遺物・遺骨としては残らない。
    - 敗者側の戦傷者は、連れ戻されることは、まず無い。
- 現在まで残った戦傷遺跡は、故地に連れ戻された勝者の側のものと考える。
  - 青谷上寺地遺跡:低温・水中で保存された遺骸は、敗者のもの。
  - 土井ガ浜遺跡:貝殻が多い砂地に埋葬された人骨は、敗者のもの
    - 多数の頭蓋骨には首の骨が遺り、首を切られた遺骨と判明。
- 戦傷遺跡から敗者と勝者が判明できる。 → 歴史解明の手掛かり



# 戦争遺跡 時期別色分け地図

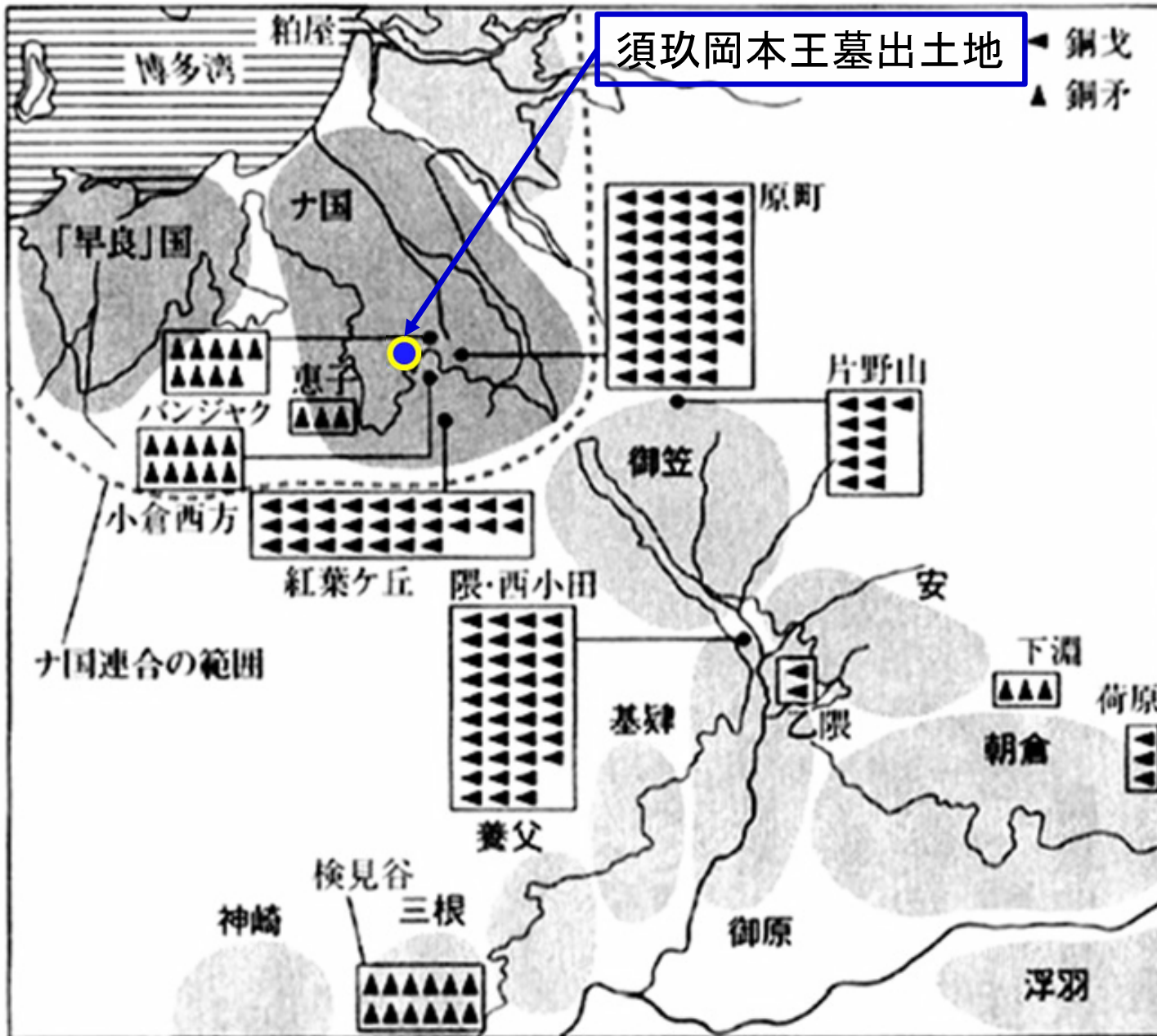
●: 弥生 前期後半 中期前半

●: 中期後半以降



- 赤四角の枠は、天孫族の領域。
- 前期後半から中期前半の時期では、長期間・複数の戦いがあり、双方が勝利した？
- 中期後半以降は天孫族が勝利

# 須玖岡本の青銅器埋納の跡



ナ国と周辺のクニグニの呪禁

青銅器の埋納は、須玖岡本の丘陵地帯の土手で行われた。

- 須玖岡本は、青銅器の誕生の場所であると同時に、終焉の地でもあった。

## —埋納の解釈—

戦争の勝利者側が、敗者の持っていた武器・祭祀器を、二度と使えないように人目に付かない処へ埋めたもの。

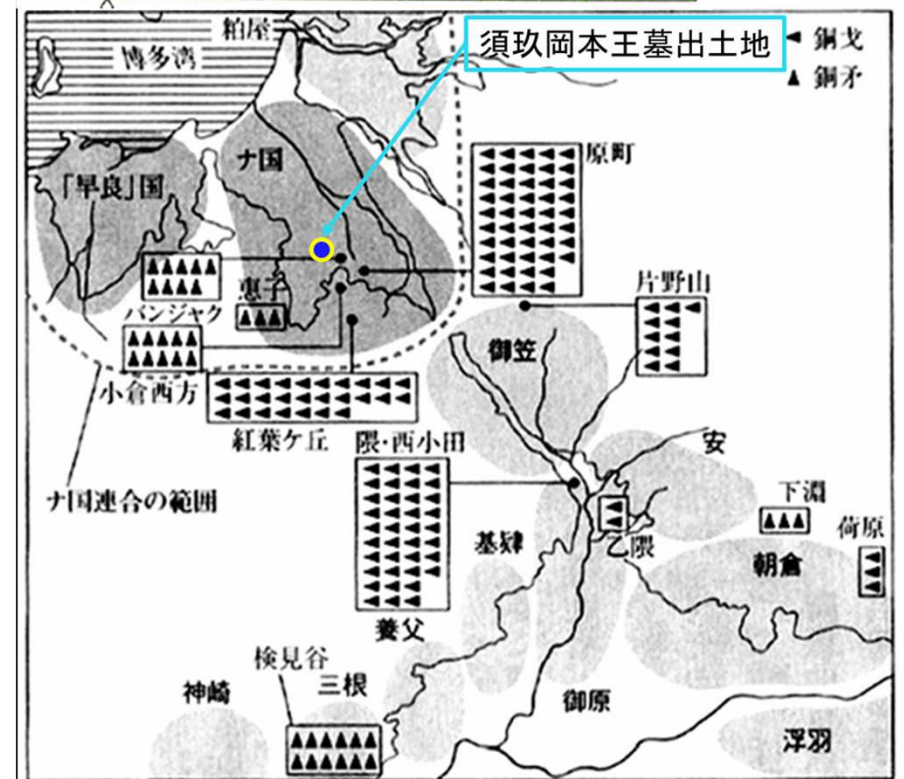
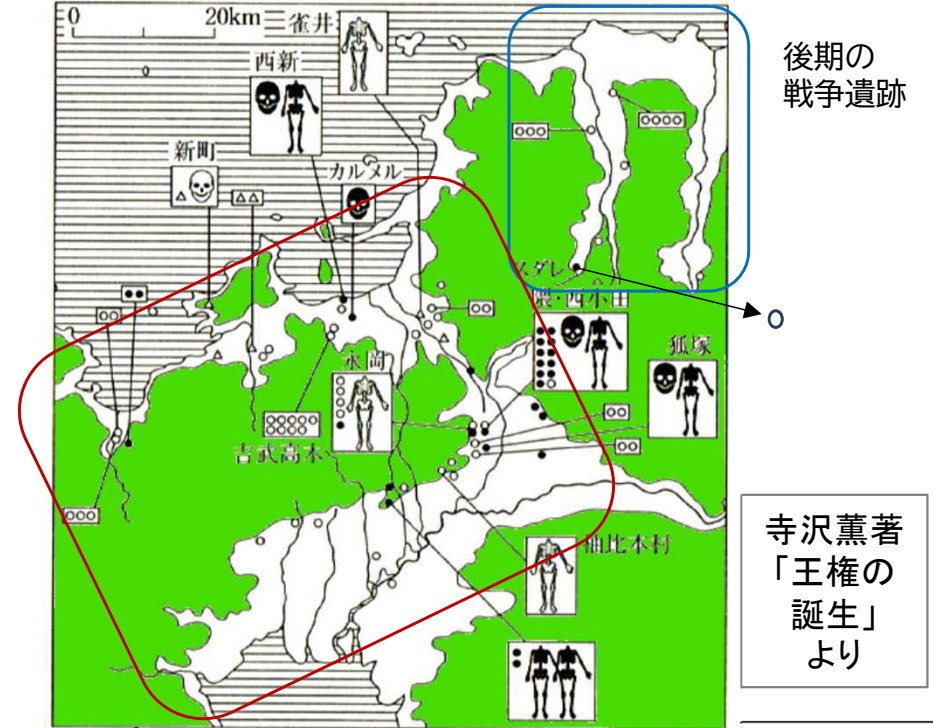
場合によっては、取り上げ、勝利の印としての故郷に持ち帰り、顕示した後に、山中に埋めた。

(左図の片野山/隈・西小田/安/下淵/荷原/検見谷はその例)

又、遠い離れた場所に居る敗者の一族が居る場合、その武器・祭祀器を、敗者の手で、山中に埋めさせた。

# 北九州の戦況を、再検討する

- 弥生前期後半～中期前半
  - 北九州全域に○が多く、ある時は、出雲族側が勝ち、別の時は、天孫族側が勝ったものとする。
  - 須玖岡本遺跡の状況から、この地域は天孫族が敗北し、一旦、出雲族側になったと考えられる。
- 弥生中期後半以降
  - 激しい戦いが行われ、天孫族に多くの戦傷者●を出したが勝利した。
    - 遠賀川側は、戦傷者を故郷に戻すことは出来ないほどに、敗退した。
- この時期が「倭国大乱」にあたと推定。
  - 勝利した天孫族側は、敗者の旗指物であった青銅製銅戈・銅矛を、天孫族の王墓(須玖岡本遺跡)に集めて戦果を示した上、周辺の山中に埋納した。
  - 更に、隈・西小田・御笠・安・神崎の各地に、勝利した軍隊が戻る時には、打ち負かした敵の旗指物を戦果として持ち帰り、故郷に勝利の報告を行ない、埋納した。



# 考古資料と記紀の対応

- 記紀の天照大神・須佐之男命記述の対応地域は、早良・福岡平野と推察。
- 王墓の検討から、天照大神等天孫族の王墓の位置は、上記の福岡平野と前原・糸島地域と推察できる。
  - 王墓には甕棺と三種の神器の副葬と言う特徴がある。
- 福岡・早良の両平野で起きた、『短期間だけ別の形式「城ノ越式土器」になる。』は、須佐之男命が高天原を攻め、天岩戸に逃避した期間に出雲族側がその地域を占拠し、生活してことに対応する。
- 甕棺の年代別出土地図から、甕棺を使用した天孫族の拠点範囲が明確となった。
- 戦傷遺跡の分布、北九州の青銅器埋納の解析から、長い戦乱の後に天孫族側が勝利したことが判明した。
  - 記紀には、「勝利した」との記述は無いが、その後、出雲国譲り・神武東征は勝利が前提になることから、記紀の記述と矛盾しない。
  - しかし、何故「勝利」を記述しなかったのか？ 疑問が残る。
- 以上のことから、次頁以降に示すように
  - 天孫降臨・日向三代の行われた地域は、前原・糸島地区と明確になる。
  - 青銅器の埋納された土地が出雲族の活躍した範囲と推定される。

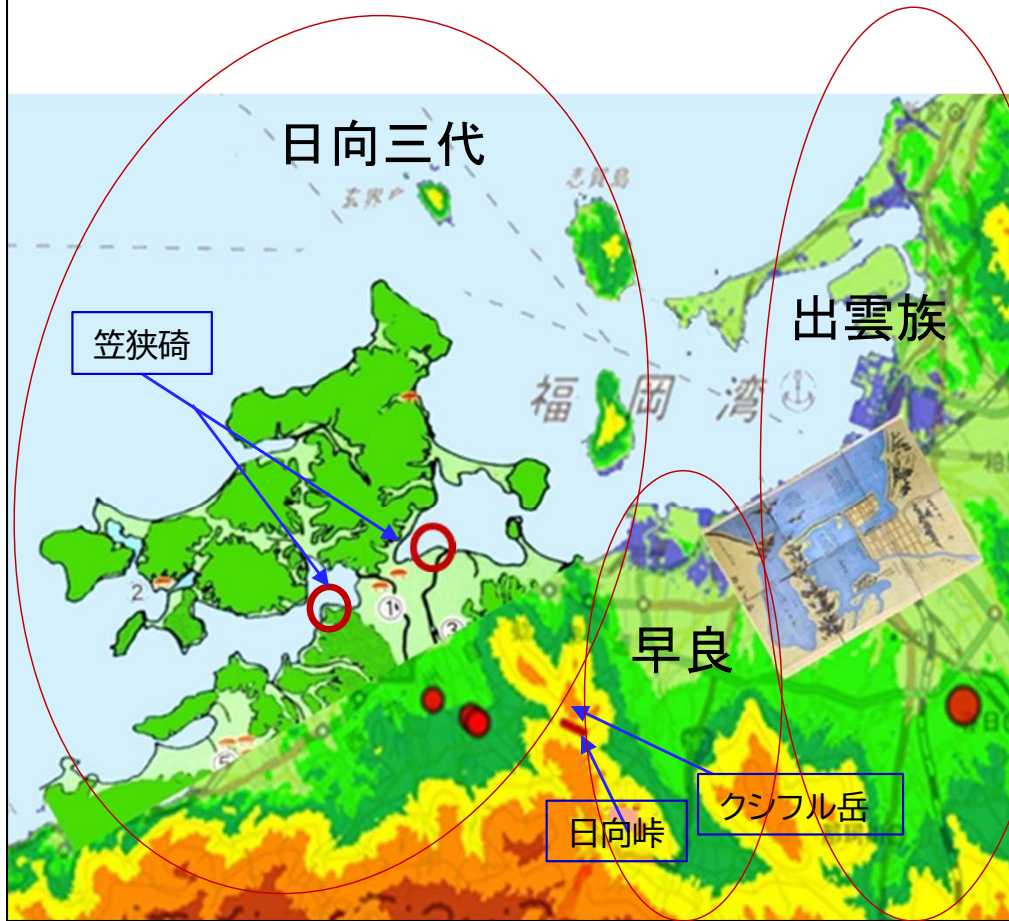
16ページ：  
天の岩戸/天孫降臨/日向三代  
の解釈:まとめ



- 天孫一族は、天照大神まで、天之御中主から12代続く家系の主要な物語が、ここから始まることは、天照大神が、歴史に残る偉大な「王」であったことを示す。
- その天照大神が、同族の須佐之男命の一族と対立し、
  - 高天原に居た天照大神が、須佐之男命に攻められた。
  - 「誓約」により、停戦・休戦が行われたが、
  - 須佐之男命が「狼藉」= 戦争を再び仕掛け、
  - 高天原は敗戦し、天照大神は逃避した。
  - 遠隔地にいた天孫一族が援軍となり、高天原を取り戻し、逃避していた天照大神が救出された。
  - 須佐之男命は、捕まり、罰を受け、遠方に追放された。
- 高天原は繁栄
  - 天照大神の世代から天忍穗耳命の世代に代わった。
  - 須佐之男命が追放されて20-30年後、再び、須佐之男命の子孫= 出雲一族が台頭し、高天原を脅かした。
  - 出雲一族の勢力に押された天忍穗耳命は、厳しい選択をせざる得なかった。
    - 長男の天火明命を出雲族側に送った。(政略結婚/人質として差し出したか?)
    - 次男の邇邇芸命に王権を譲り(三種の神器を渡し)、多くの重臣や、刀鍛冶や鉄・鏡・玉作の生産者、主な武将を添えて、乃ち、ほぼ一国を構成する人員を帯同して、新天地へ移動させた。
- 天孫降臨/日向三代
  - 新天地に移動した邇邇芸命は、出雲一族の勢力に負けず、新しい国を作り、配偶者を得て、子孫を残した。
    - 配偶者については、配偶者の親と争いが発生したが、子供達が生まれた。
    - 王位継承争いが発生、弟の火遠理命が継承。兄の日照命は服従し、隼人の祖先となった。
    - 鵜葺草葺不合命が誕生、五瀬命、稲飯命、三毛入野命、伊波礼毘古命の4兄弟誕生
- 出雲国譲り/神武東征に続く

# 日向三代の土地

- 天孫降臨し、日向三代が活躍した土地が何処かは、議論が有るところ。
  - 天照大神の世代から天忍穗耳命の世代に代わった。
  - 須佐之男命追放後20～30年後には、出雲勢力が再び、台頭し、天孫族の高天原を脅かした。
  - 次男の邇邇芸命に王権を譲り(三種の神器を渡し)、多くの重臣や、刀鍛冶や鉄・鏡・玉作の生産者、主な武将を添えて、乃ち、ほぼ一国を構成する人員を帯同して、新天地へ移動させた。
  - 上記の状況から、天孫降臨を言う天孫族の大移動の目的は、本拠地を捨て、出雲族からの襲撃を避け、生存し、軍備力を整え、最終的に出雲族を討ち、本拠地を再獲得し、本来の支配体制に戻すことと理解する。

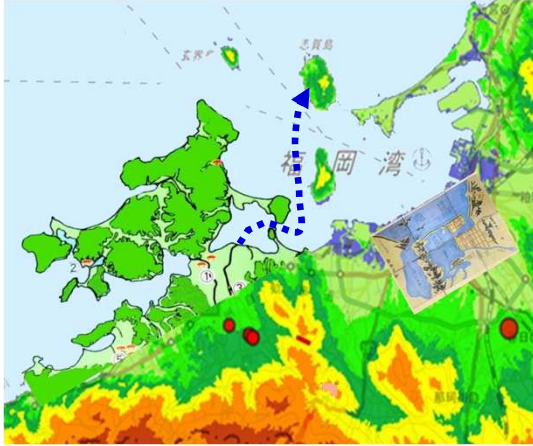


- 「ここは韓国に向かい、笠沙の御前を真来通りて、朝日の直刺す国、夕陽の日照る国なり。故、ここは甚吉き地。」との古事記の記載から、日向三代の土地を推察する。
  - 1) 韓国に近い→鉄の入手・輸入に好都合。  
(反撃の為の武器等の生産に都合が良い)
  - 2) 朝日/夕陽がそのまま見られるのが良い土地と云う理由は、旧居住地では、朝日・夕陽が見られなかったと推定できる。
- ✓ 須玖岡本地区は、東西に高い山が連なり、朝日・夕陽が見られない場所にある。天照大神等の居た場所をこの須玖岡本地区とすると、ここから徒歩で移動可能で、韓国に近い場所＝前原・糸島地区が日向三代の土地となる。
- ✓ 出雲族の居る地域と、日向三代の間には、天孫族の居る早良平野が存在する。

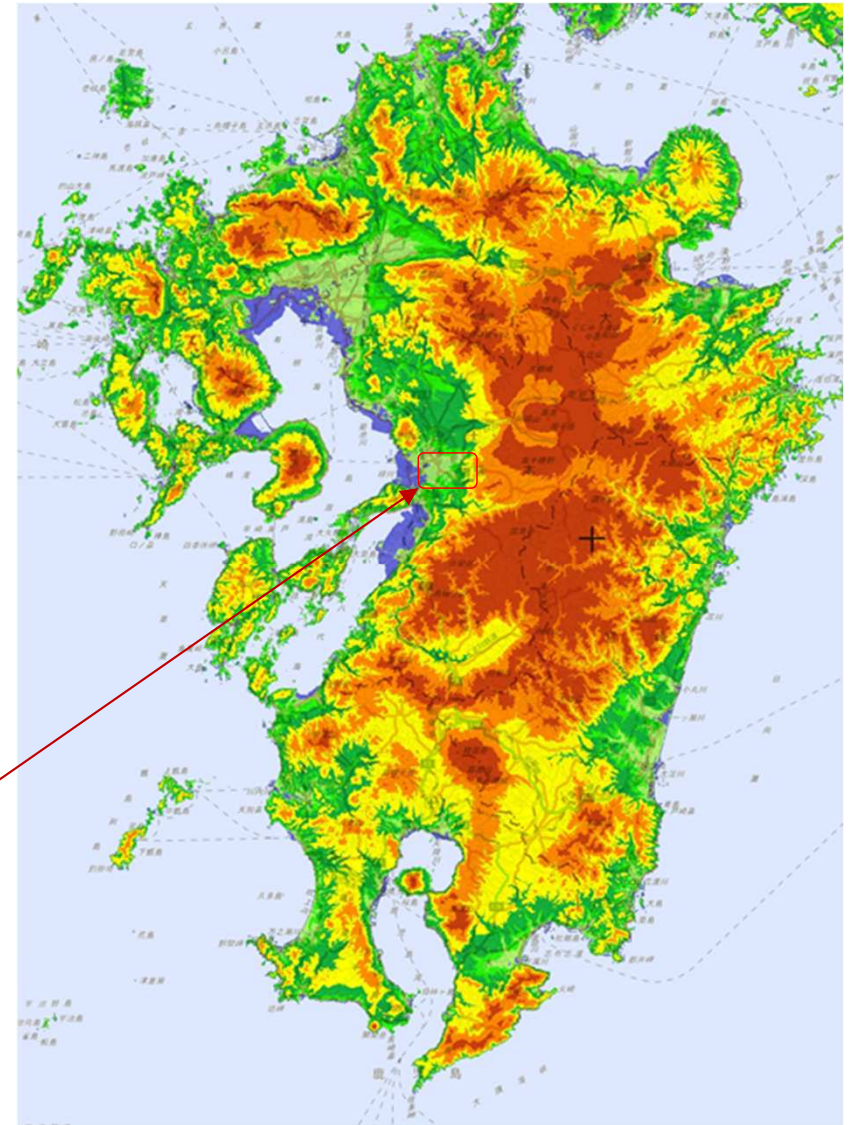


# 日向の地と、兄の海幸彦 = 火照命の移動先

- 日向の地を糸島・前原地区とすると、
  - 到着地は、古糸島半島の付け根部分
  - 海人族の島は志賀の島。安曇族と推定する。



- 兄・海幸彦は、隼人の祖先になったとされることから、海幸彦 = 火照命が、王位継承争いに敗れ、遠方へ行った土地は、熊本と考えられる。そこが隼人の地で有ると推測する。
  - 甕棺出土地のIII期の熊本に運ばれた大型甕棺が、火照命等のものと推察できる。
  - 熊本に居た隼人一族の主力部隊は、大和朝廷成立後に、大和に移動し、鹿児島や人吉盆地などに居た隼人族は、そのまま、残存したものと推定する。



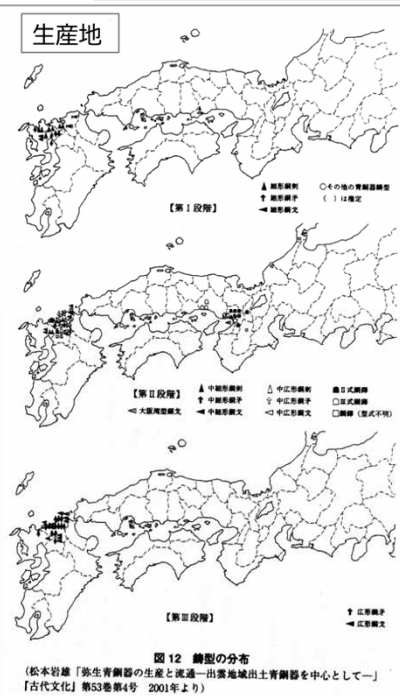
青地の部分は、弥生時代には海であったと推定する部分。

## 天孫族と出雲族の地域区分

- 甕棺の分布図：天孫族と出雲族の地域が判明
- 戦傷遺跡：天孫族と出雲族の戦争の存在が判明。
- 副葬：銅剣など豪華な副葬品は、天孫族のもの
- 埋納：埋納された青銅器は、出雲族のもの。

• 青銅器の出土地の分布図から判る  
天孫族と出雲族の地域分布

## 天孫族の地域：青銅器を墓に副葬



• 左図は鏢型の分布、右図は副葬品として出土分布図

• 鏢型は生産地を示す。

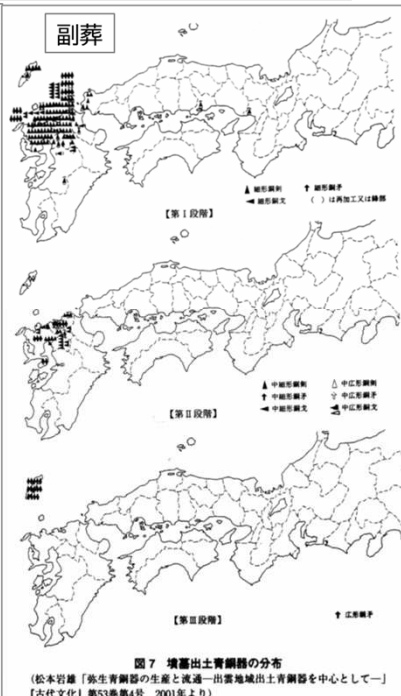
• 第一段階と第三段階では、生産地は北九州に限定。

• 第二段階では、北九州に加え、大阪を中心に滋賀、奈良及び北陸が生産地に加わった。

• 北九州に限り、副葬品として墓に納められた。北九州以外は、墓に納めるには貴重過ぎたものと考えられる。

• 出雲族は、北九州から青銅器の供給を受けていたが、第二段階では、自分達の手で生産を行った。

• **それだけ大切な品物を、土中に埋めたのは、特別な事情があったこと、意味する。**



## 出雲族の地域：青銅器を埋納

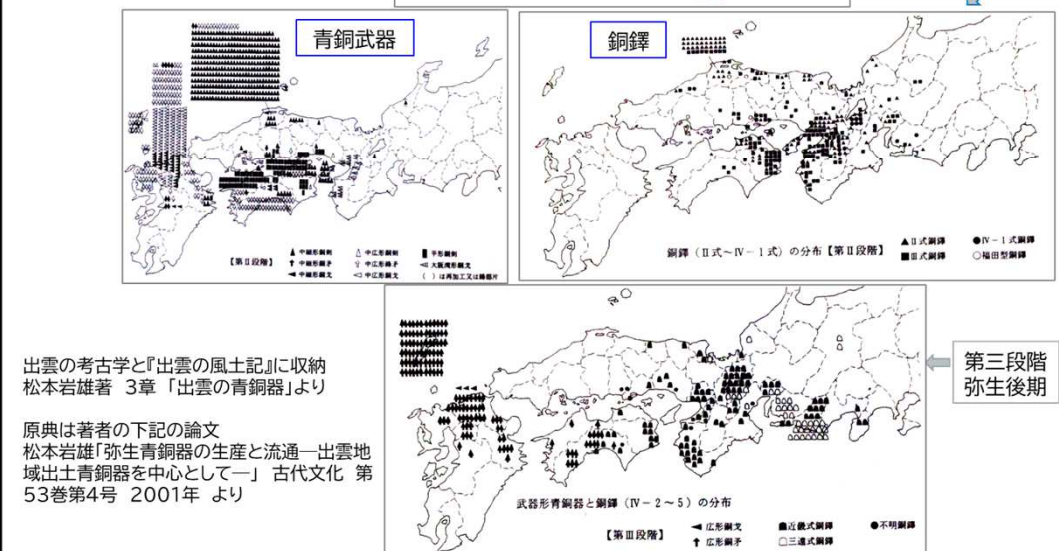


表1-5 銅矛・銅剣・銅鐸の移り変わり

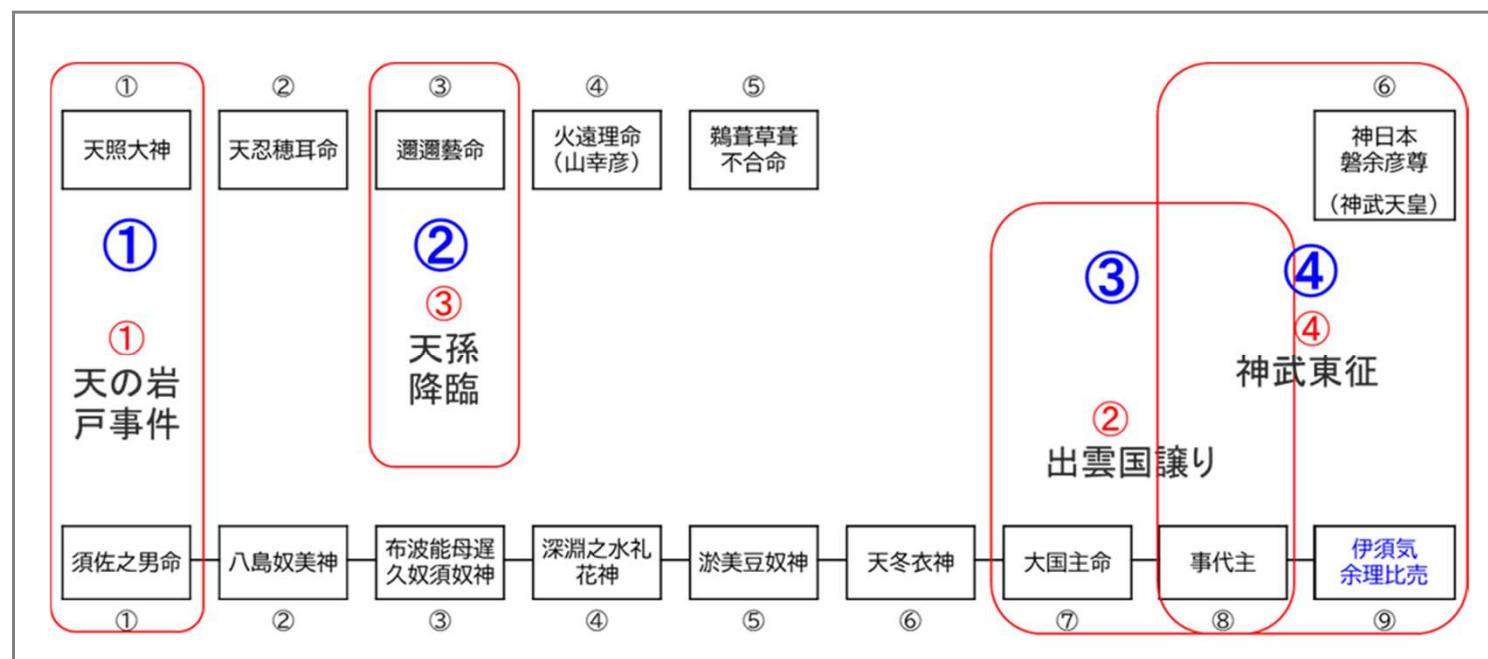
参照文献：『古代出雲文化展 神々の国悠久の遺産』 島根県教育委員会・朝日新聞社 1997



# 出雲の国譲り・記紀解釈 ①

古事記では、「岩波文庫の葦原中国平定」と云われる段に次の記載がある。

- 天忍穗耳命が、葦原中国が騒がしいとして、天菩比命を派遣した。
    - 天菩比命は、大国主命に媚び付き、3年経っても復命をしなかった。
  - 天若日子を派遣したが、大国主の娘：下照姫と結婚し、8年間復命しなかった。
    - 天若日子は使者の雉名鳴女を天羽々矢で射殺したが、その「返し矢」で死んだ。
    - その葬儀で、天若日子の親が、義兄である阿遲志貴高日子根神を天若日子と間違える挿話があり、葬儀の役に鳥が携わること、など興味深い。
- ✓ 時系列を考えると、
- 天菩比命の話は、天忍穗耳命が派遣をした話で、時代は異なる。
  - 天若日子の話は、物語に登場する人物達が大国主命とその息子・娘で、倭国大乱直前の話と推定。



天菩比命/天若日子の派遣の話の後に、建御雷之男神派遣の記載が表われる。

- 天照大神が、出雲の国を平定するため、建御雷之男神に天鳥船神を副えて派遣。
  - 伊那佐之小浜で剣の切っ先に胡坐をかいて、出雲族に対して「国譲り」を交渉を行った。
- 「国譲り」交渉では、大国主命は、息子の事代主に、まず、了承か否かの二択回答を要求。
  - 事代主は、国譲りを了承する。
  - 大国主命は、もう一人の息子の建御名方神にも回答をさせる。
    - 建御名方神は、争う態度を示し、力競べをする。
      - 手を握りつぶされ、建御名方神は逃げ出した。これは戦争開始を示す。
    - 天孫族の建御雷之男神は信濃の諏訪の地まで追い詰めた。
      - 建御名方神は、諏訪の地から出ないことを条件に命乞いをして、国譲りを認めた。
- 事代主と建御名方神の両方の息子が認めたため、大国主命は大きな宮殿を立てることを条件に、国譲りを認めた。
- 建御雷之男神は、天照大神に、成功の報告した。

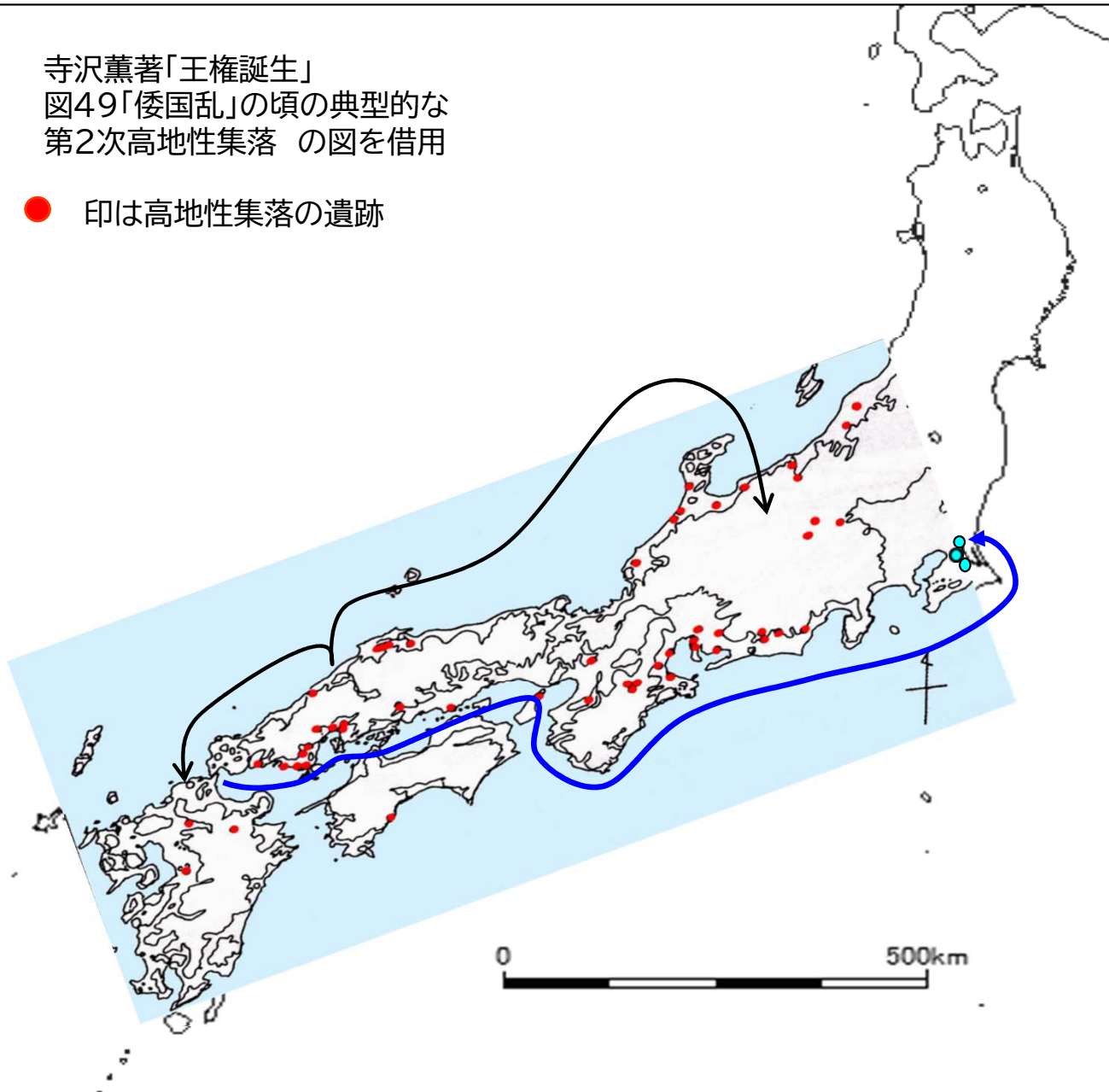
日本書紀も、上記のストーリー展開となるが、次のような違いが有る。

- 使者は経津主神で、武甕槌神＝建御雷之男神が副となる。
- 使者は、大己貴神＝大国主の勧めた岐神の導きにより周辺を平らげた。
  - この神は今、東国の香取の地に在る。(第2の一書)
- 日本書紀の記述では、
  - 大国主命が、矛を差し出す記述がある。
  - 「建御名方神」に関する記述は無い。

# 出雲の国譲りの空間に注目

寺沢薫著「王権誕生」  
図49「倭国乱」の頃の典型的な  
第2次高地性集落 の図を借用

● 印は高地性集落の遺跡



- 神武東征の開始の描写を見よう。東征の物語は、会議か武甕槌神・経津主神は、高天原に呼び出され命を受ける。
- 出雲へ行き、国譲りの談判を行う。
- 建御名方を追い長野県・諏訪まで行き、降伏させ、
- 出雲に戻り、国譲りで実現し
- その結果を高天原にもどり報告。
- 出雲の久那斗神を道案内人として、領土を受け取るために、人員を率いて、東端の鹿島・香取まで、行き住み着いたものと推測する。

# 出雲の国譲りの記述と考古資料の対比

出雲大社境内遺跡と出雲大社本殿の復元  
神戸大学建築史研究室



加茂岩倉遺跡銅鐸39個



荒神谷遺跡



青谷上寺地遺跡

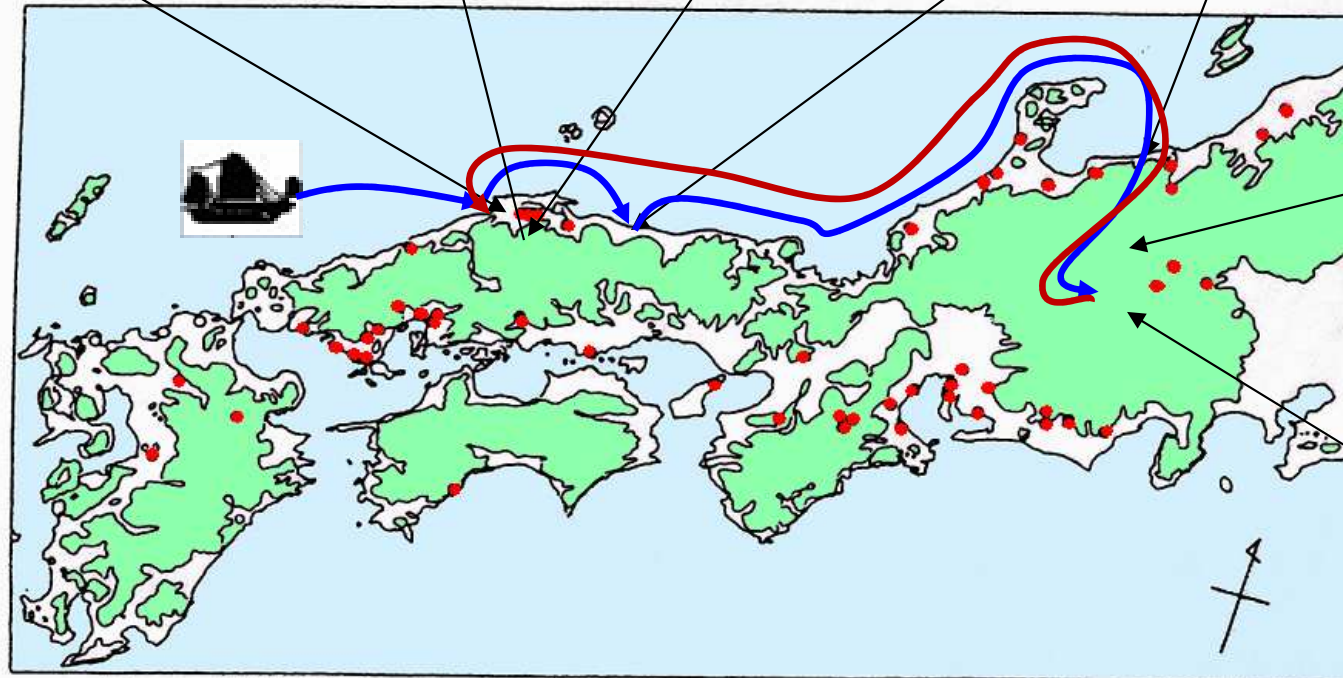


図49 「倭国乱」の頃の典型的な第二次高地性集落(寺沢薫「王権誕生」)

受傷人骨から弥生時代には、限定した地域で戦争があったことが判り、戦後処理で青銅の武器・銅鐸が埋納されたことを考えると、出雲国譲りと遺跡・遺物との対比・関係が、信憑性を帯びてくる。

# 青谷上寺地遺跡

第四紀学会誌より  
「青谷上寺地遺跡の周辺  
域の弥生時代の景観史」  
安 昭炫著 より



鳥取市教育委員会発行のパン  
フレット2種より借用

- ①青谷上寺地遺跡
- ②青谷上寺地遺跡のひとつ

## 溝に散乱する殺傷人骨

- 弥生時代は日本海に面し、長い入江があり、優れた港湾で、周囲には水田が広がる処。
- 湿地帯であったことが上手く幸いして、遺物が保存され、現代に残った。
  - 住宅跡/杉の大板/様々な木製品・道具/釣り具/籠/木製容器/土器/玉造関連の道具/鉄製工具類など。
  - バラバラな人骨が100体以上(傷付けられた骨が100点以上) 青銅製の鏃。戦争遺跡
  - 弥生人の脳が残存
- この遺跡は、水田に囲まれ、玉製品を生産し、日本海の宝石の流通ルートの拠点であったが、戦争に巻き込まれ人々が虐殺され、集落が崩壊したと見られる遺跡。
- 出雲地域から近く、最初の力比べを行った地域に該当し、文献の記述に増した、手ひどい痕跡が残されたものを見る。十分に対比される。

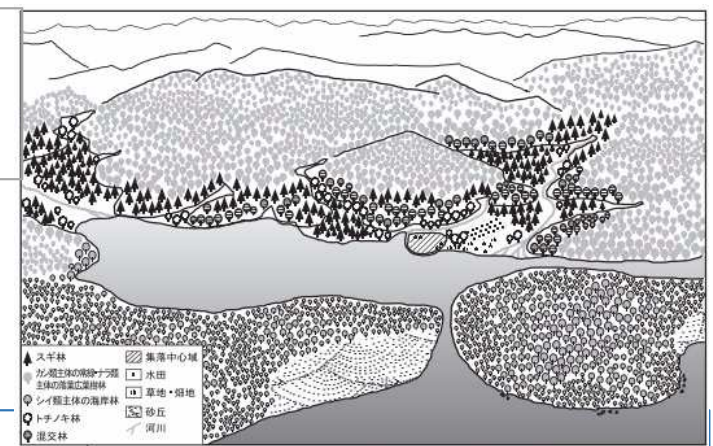


図 5 青谷上寺地遺跡と周辺域の景観復原図



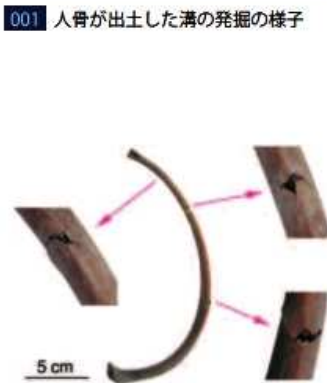
001 人骨が出土した溝の発掘の様子



002 前頭部の殺傷痕



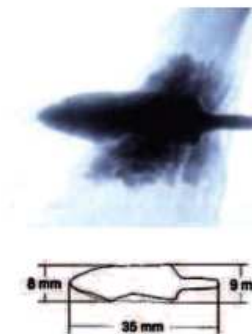
003 胸椎についた鋭い殺傷痕



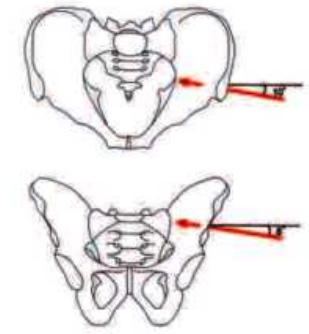
004 3ヶ所も傷ついた肋骨



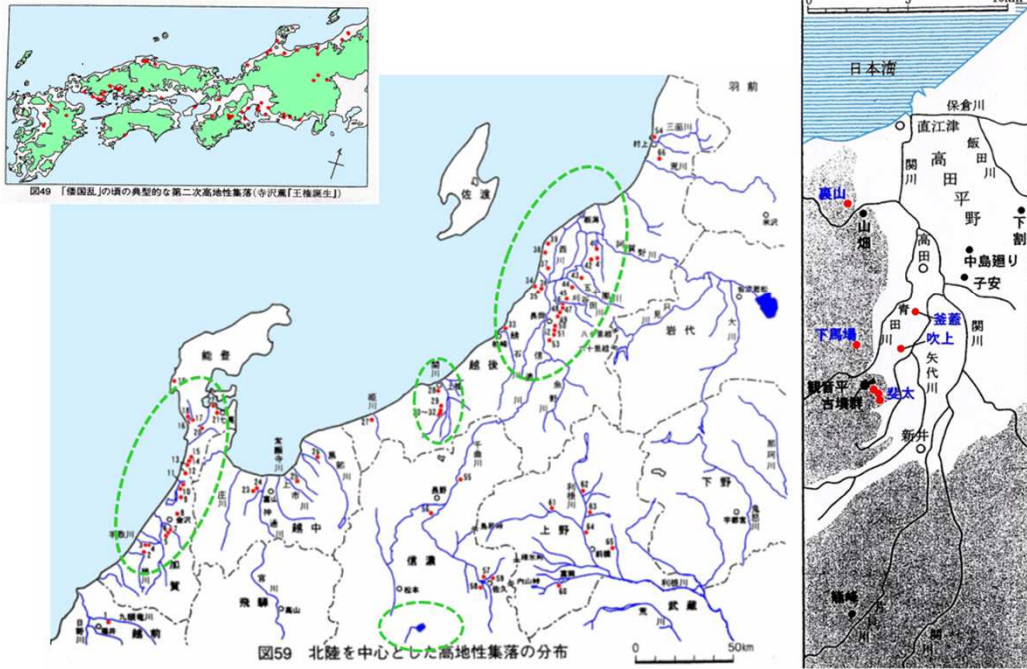
005 銅鏃の刺さった寛骨  
(ほぼ前方から見たもの)



006 刺さっていた  
銅鏃のX線写真と  
銅鏃の大きさ



007 銅鏃の進入方向  
正面観(上)  
上面観(下)



裏山遺跡

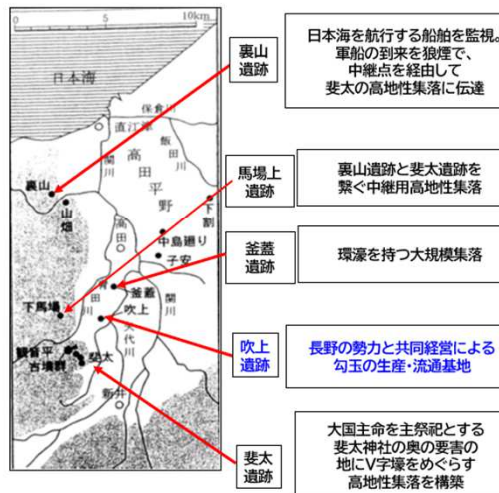


斐太遺跡



50 吹上遺跡と高地性集落斐太遺跡

(甘粕 健著「倭国大乱と日本海」第4章越後・会津の情勢を参考に)



- 吹上遺跡:玉作集落
  - ヒスイ製の勾玉と緑色凝灰岩の管玉を主力
  - 生産当初より洗練された技術を保有
  - 大量生産のための効率的生産体制
  - 当初は北陸系土器が主体(8割)
  - 末期は信州系が7割 北陸系3割
- 天孫族軍の出雲への襲来と建御名方の敗戦の報が伝わる。
  - 吹上遺跡近くの斐太神社の裏山に高地性集落(延長900mの環濠含む)を築造。
  - 海岸線を見る高地性集落から中継一ヶ所を経て、襲来情報入手の段取りを備える。
  - 斐太高地性集落から出土するのは、殆どが北陸系。
    - 信州系の土器は無い。
  - 長野から来た者(技術者)は、吹上を離れ、信州にもとつたと見られる。
    - 裏山遺跡も斐太遺跡も、実際に戦闘が行われた形跡はない。
    - 吹上遺跡は、廃止された。
  - その後、信州人は、この地域には、戻らなかった。(信州系土器の出土状況から)
- 戦闘の痕跡は残されていないが、準備が行われ、信州人が戻り消えた事実は、天孫族の到来が有ったことを示す。

長野県辰野市の矢野神社には、大国主命/子・事代主/子・建御名方神が、諏訪を攻め取るために来たが、諏訪が手ごわいため、兵力を集めてから、攻め入ったとの伝承がある。

52 注目する長野県での埋納:「銅鐸と武器が同一箇所から」

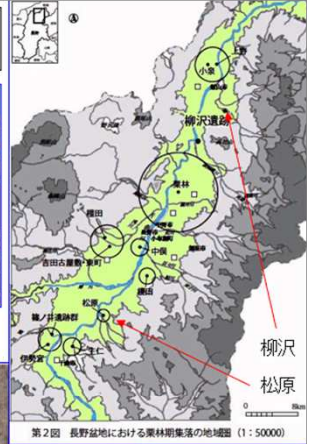


銅鐸6個と銅戈16本が併存 島根県神前神社古遺跡(島根県教育庁埋蔵文化財調査センター提供)



柳沢

長野県埋蔵文化センター  
発掘調査報告書100  
中野市柳沢遺跡 2012.3  
より



青銅鐸出土状況 (北から)

出雲地方



# 出雲地方の銅鐸・銅剣・銅矛の埋納

- 島根県加茂岩倉遺跡  
銅鐸\* 39口 島根県雲南市(旧大原郡加茂町)出土  
文化庁蔵、島根県立古代出雲歴史博物館  
1996年(平成8年)に検出されたもので、  
1つの遺跡からの出土例としては日本最多の39口



- 島根県荒神谷遺跡出土品\* 1983年  
横帯文銅鐸1口 袈裟襷文銅鐸5口  
銅剣358口 銅矛16口  
島根県出雲市斐川町神庭西谷出土  
文化庁蔵、島根県立古代出雲歴史博物館保管  
尾根の斜面から銅剣358本、銅矛(どうほこ)16本、銅鐸6口が出土した。  
畿内を中心に出土する銅鐸、北九州を中心に出土する銅矛、  
出雲地方特有の形式をもつ銅剣が同一遺跡から、しかも大量に出土したという点で学術的価値が高い。



銅鐸・青銅剣は弥生時代の使用時には、錆びの無い光った状態だった。



島根県立古代出雲歴史博物館  
展示室

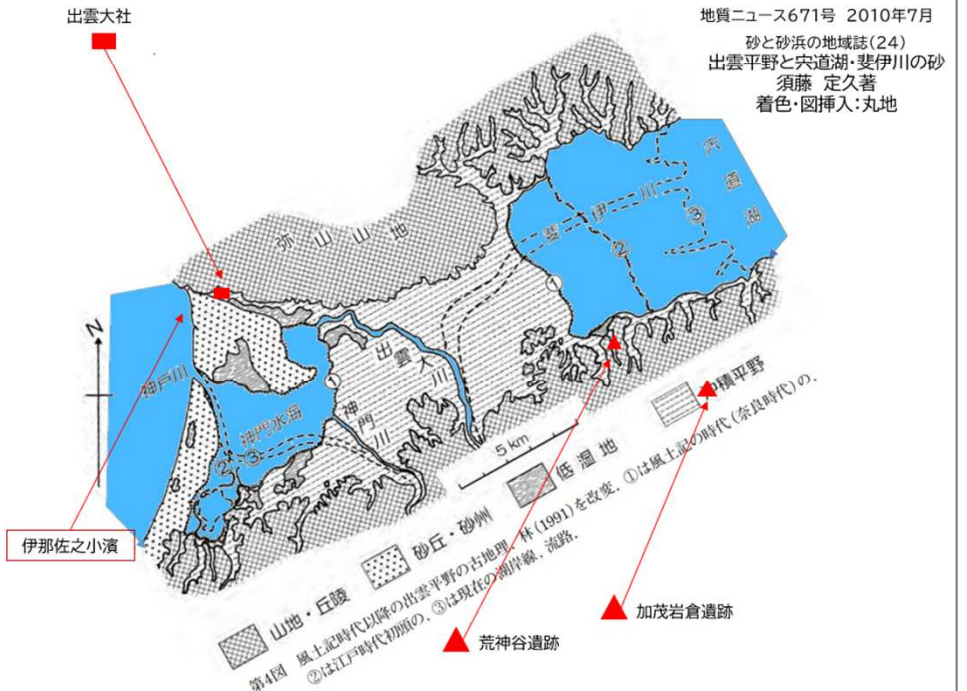


銅鐸埋納状況復元  
東京国立博物館企画展示

# 出雲国譲りの状況



# 古地図で見る出雲国譲りの状況

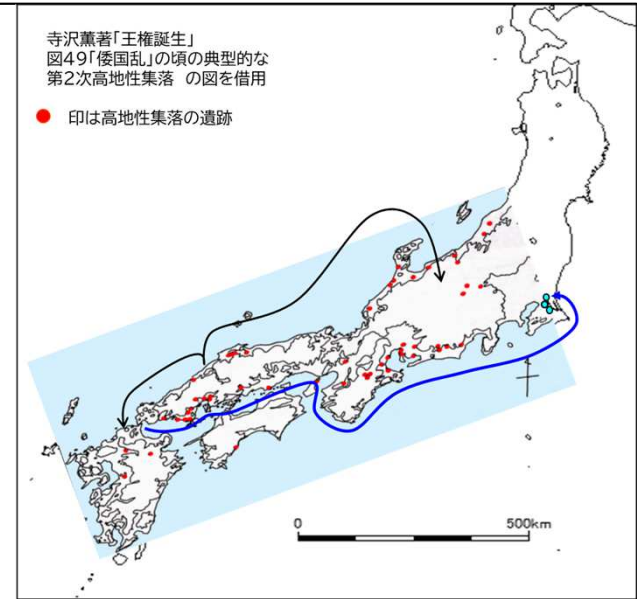


# 建御雷之男神/経津主のその後の痕跡

- 古事記で国譲りの立役者である建御雷之男神/日本書紀での立役者経津主神が、建御名方神を追い鳥取県の青谷上寺地遺跡から北陸・能登半島・糸魚川を越え長野県の科野の諏訪湖まで移動し活躍した遺跡が残されている。
- その後、出雲地方に戻り、国譲りを確定し、道案内の岐神/久那戸神と全国を平定し、進んだと記述があり、東の方に行ったはず。その遺跡/痕跡の存在が確認できる。

寺沢薫著「王権誕生」  
図49「倭国乱」の頃の典型的な  
第2次高地性集落の図を借用

● 印は高地性集落の遺跡



## 東国三社

- 出雲の国譲りに由来する三神の神社が 関東の東に存在する。
  - 建御雷之男神=武甕槌大神
  - 経津主大神
  - 久那斗神=岐神
- 香取神宮：経津主大神
  - 近づくとも水郷の景色
  - 低い丘陵と田畑と利根川
  - 神宮の裏手は、かつての香取海の水平線が広がる
- 息栖神社：久那斗神
  - 利根川を渡り、鹿島側の水辺に大鳥居
  - そのまま船でお参りできそうな処
  - 天の鳥船を祭った神社
- 鹿島神宮：武甕槌大神
  - 低い丘陵にあり、古代からの森が茂る
  - 一の鳥居は水の中
  - 藤原鎌足の出生地跡に神社がある



## 香取海

約2000年前には、関東地方はどんな状況だったのか？

- 2000年前は香取海がある
  - その湾の入り口の対岸に鹿島神宮と香取神宮が対座
  - 常陸風土記にその記載がある。
- 香取神宮/息栖神社/鹿島神宮は江戸時代まで存在した香取海に面した処に所在。
- 国譲りが行われたならば、その当時の最適の地に、主要拠点が置かれ、神社として残ったと推定される個所に、三神社が存在する。
- 三神社の由来からも、地形からも約2000年前の出来事が推察できる。

香取海は、江戸時代初期の利根川の付け替え・東遷まで続く



【資料】「東国三社の歴史」千原隆和・上野浩吉監修 平成12年

- 「国譲り」に対して異議を唱えたの建御名方神が初戦で敗北した証拠が青谷上寺地遺跡に残る虐殺の跡と推定。
  - 諏訪まで追い詰められた経緯が、戦争遺跡である高地性集落の配置で裏付けられ、戦傷人骨と青銅器埋納の遺跡で戦争跡が確認できる。
  - 諏訪神社・安曇野の穂高神社の祭神が、建御名方神であり、攻めた安曇野一族であることも証拠となる。
- 日本書紀に大国主命が矛を納めた記述があるが、荒神谷・加茂岩倉遺跡の大量の青銅器の埋納は、出雲族の敗戦の証拠の品であると理解する。
- 記紀に記す天孫族の国譲りを実行した將軍達の最終居住地区も東国三社として確認できる。
- ✓ 記紀の国譲りの記述は、考古資料で確実に裏付けられた。
- 記紀には、天孫族が出雲族に追い詰められ、本拠地を捨てざる得なかった切羽詰まった状況が記されているが、国譲りの開始状況から見ると、最初から完全に天孫族を圧倒し、追い詰めている。逆転した状況が窺える。
  - これは、北九州に残る大量の戦傷遺跡・大量の青銅武器の埋納を考慮すると、天孫族が出雲族と大決戦を行い、勝利したことが前提になっていると想定できる。
  - この大決戦が倭人伝に記される「倭国大乱」と想定されるが、記紀には記載されなかった。

# 神武東征 : 記紀の記載概要

- 神武東征の当事者4人が鵜葺草葺不合命の子として生まれたと記す。
  - その中に長兄の五瀬と末弟の神倭伊波礼毘古命(カムヤマトイワレビコ:後の神武)がいる。
  - その出生の記載で、2名の兄弟:御毛沼命と稲氷命の二人は海で死ぬと記した。
- 出雲の国譲りの後に神武東征が行われたことを前提に解釈すると、
  - 国譲りに派遣した将軍達の報告を受けて、東北に至る広大な地域が支配地に入ったことを認識した上で、葦原中つ国を治めるために、支配する者が、九州に居て良い? 何処が支配者の居るべき地点かを相談した。
  - 結論は、支配する国の中心地域で大和が適切と一致し、移動を開始した。
- 経由地
  - 筑紫国の岡田宮で1年過ごし、
  - 阿岐国の多祁理宮(たけりのみや)で7年、
  - 吉備国の高島宮で8年を費やした。
- 大和へ侵攻
  - 船で古代の大阪湾に入り、大和へ侵攻するが失敗し、直接生駒山地越えを図ったが失敗。
  - 大将の五瀬が矢傷を受け、東側から大和を攻めると転進を指示し、その後死亡。
  - 和歌山を経由し、紀伊半島南端を経て、天磐盾に登る。
  - その後熊野灘で遭難。二人の兄は遭難死。神武とごく少数の人員が助かる。
  - 丹敷戸畔を殺害し、剣を持って大和に向け出発。
  - 山中を難行し、八咫鳥の案内で、大和の東側の宇陀までたどり着く。
  - 途中で協力者を集め、策略を講じて大和を攻める。
  - 大和を護る長脛彦が、神武へ使者を送り天孫族の印を確認する。
  - 大和側の主の饒速日(ニギハヤヒ)が長脛彦を殺し、降伏。
- 神武大和入り
  - 事代主の娘を正妃とし、婚姻。
  - 白橿原宮を作り、天皇に即位

- 古事記の記述
  - 東征のスタートから東征完了し、大和朝廷成立まで記している。
    - 但し、熊野灘での遭難事件に関しては、記載していない。
- 日本書紀の記述
  - 出雲神話などでは、記載していない部分が有ったが、スタートから完了まで記している。
  - 古事記よりも具体的に詳細に記していることが多い。
  - 事件毎に、発生の年月日を記載していることが多く、順序・年年月が判り易い。
    - 但し、大和に侵入するまでの経過年数は、古事記の記述とは大きく違う。
  - 熊野灘の遭難事件を記載。
  - 大和への侵攻・戦争部分に関して、古事記の記述には、一部差異が見られる。
    - 神武東征に関しては、煩わしい一書の記述がなく、無用の苦労が無い。
- 留意点
  - 神武東征が困難であった理由は、出雲国譲りの結果、出雲族が譲渡した本州・四国の地を、天孫族の饒速日(ニギハヤヒ)が、支配し、五瀬(イセ)達の到来を阻んだことにある。
  - 熊野灘の遭難事件は、神武東征軍のほぼ全滅を意味し、歴史上大きな意味を持つ。
  - 神武東征軍が移動した後の、元の本拠地：九州についての記述が無い。

## 神武東征の経路

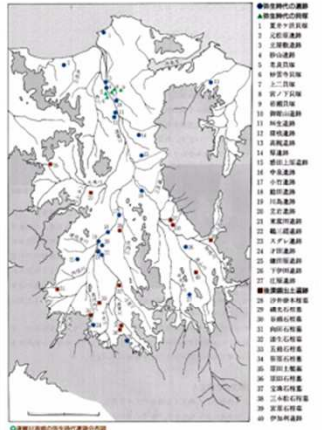


# 経路3地点の検討

- 経路した岡田宮・阿岐国の多祁理宮・吉備国の高島宮を古代の地図を想定し、検討して、海上航行した神武軍の経路点として、適切な個所であったことを確認した。

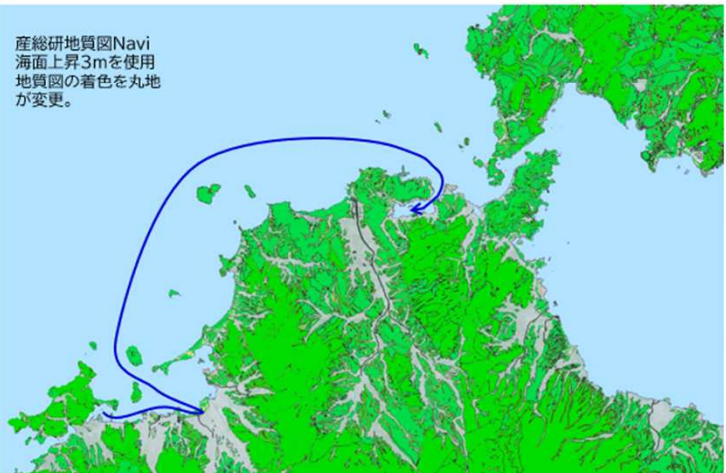
## 糸島・前原から岡田宮へ

- 五瀬が率いる東征軍は、前原・糸島から筑紫を経て、岡田宮(洞海湾)へ出立
- 洞海湾は弥生時代には広く、水深もあり、遠賀川河口からの水路もあった。
  - 外海の荒れた波高を避けるため、遠賀川経路は有効だった。
- ✓ 神武東征の出発点は宮崎県との説は有るが、出雲族との決戦に勝った天孫族の主要な出発点は、前原・糸島地区から。
- ✓ 足一騰宮の方が先に記されているが、出立地を誤解した記紀著者の誤り。
- ✓ 古事記に記す一年間は、脊振山地南側の軍の集合を待つため有効な期間。



竹中岩夫著「北九州の古代を探る」より 丸地着色

産総研地質図Navi  
海面上昇3mを使用  
地質図の着色を丸地  
が変更。



## 阿岐国の多祁理宮(たけりのみや)

- ウィキペディアより
  - 多家神社(たけじんじや)は、広島県安芸郡府中町にある神社。
    - 式内社(名神大社)後継社、安芸国総社後継社。旧社格は県社。
    - 別名として「埃宮(えのみや)」とも。
  - 社伝では、式内多家神社は神武天皇が東征の際に7年間滞在した阿岐国(安芸国)の多祁理宮(『古事記』あるいは埃宮『日本書紀』)の跡に創祀されたものとしている。『延喜式神名帳』では名神大社に列している。
  - 中世には武士の抗争により社勢が衰退し、所在がわからなくなった。
    - 江戸時代になると、境内社に「たけい社」のあった「松崎八幡宮」と、安芸国総社である「総社」が式内多家神社の後裔社を主張し、論争となった。
    - 結局、明治6年両社を廃止し、現在地の「誰曾過森(たれそのもり)」に社殿を造営して、両社で祀られていた神を祀る「多家神社」が新たに創建された。



- 927年の「延喜式神名帳」に前進の神社が存在。神武東征伝承に基づき神社を引き継いでいるとのことなので、記紀とも合致。
- 古代の地形を考えると、広島湾は土砂の堆積がまだ少なく、近くまで海岸が有って、平坦地が回りに広がり、大きな河川からは離れ、水害の少ない、良い立地条件と思える。



(新幹線線路・山陽本線の南側まで海岸?)  
(右の地図では、標高2.5m以下の地域は水色)  
(広島原爆ドーム)

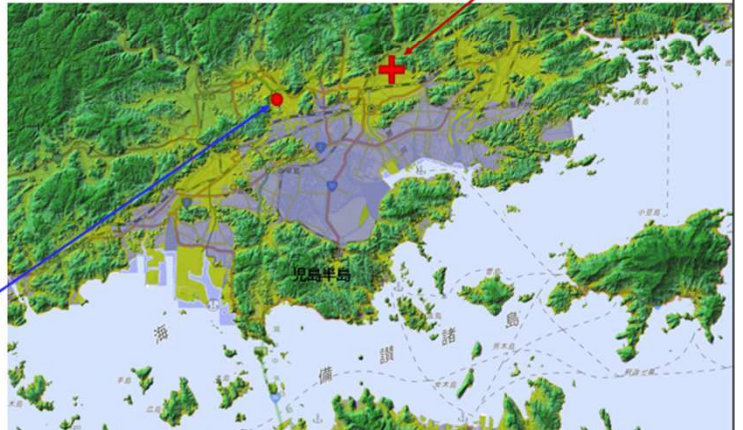
## 吉備国の高島宮

- ウィキペディアより
  - 高島宮、高嶋宮(たかしまのみや、たかしまぐう)は、神武天皇が日向から大和国への東征途上で、吉備国に宮んだとされる行宮(かりみや)である。吉備高島宮、吉備高嶋宮(さびのたかしまのみや、さびたかしまぐう)とも呼ばれる。
  - 昭和13年(1938年)から15年にかけて、文部省が当時の学界の総力をあげて学術的な「神武天皇聖蹟調査」を試みた結果、当時の岡山県児島郡甲浦村大字宮浦字高島(現岡山市南区宮浦)を「聖蹟伝説地」に認定した。
  - 同様の伝承を有し、または故跡に比定される神社(論社)は岡山県内や周辺一帯に複数存在している。



神武天皇聖蹟高嶋宮顕彰碑  
(岡山県岡山市の高島)

- 国土地理院地図で、標高2.5m以下の地域は水色にしたもの。
- 児島半島は、古代では陸に繋がらず島であったと言われる。2.5m以下の地域は、弥生時代には海であったと推定される。
- 高島宮と指定される個所は印の位置で、海より近く、河川に近く、軍船を整えるには、適切な箇所と見える。
- この地域は、東征以前は、旧出雲側の有力地域と想定。彌生古墳の楯築古墳などが存在することも、証拠となる。



# 吉備から大阪湾・大和侵攻

## 古事記

- 浪速国の白肩津に停泊すると、登美能那賀須泥毘古(ナガスネビコ)の軍勢が待ち構えていた。
  - 盾を並べて防いだため、盾津、蓼津と云う。
- その軍勢との戦いの中で、五瀬命是那賀須泥毘古が放った矢に当たってしまった。
- 五瀬命は、「我々は日の神の御子だから、日に向かって(東を向いて)戦うのは良くない。
- 廻り込んで日を背にして(西を向いて)戦おう」と言った。
- それで南の方へ回り込み、五瀬命は男の水門に至り雄たけびをして、亡くなった。墓は竈山にある。

## 日本書紀

(東征5年目)

- 2月11日、難波の碕に至り、その地を浪速国と名付ける。
- 3月10日、河内国草香邑青雲の白肩の津に至る。
- 4月9日、龍田へ進軍するが道が険阻で先へ進めず、戻り、東に軍を向けて胆駒山を経て中洲(うちつくに)へ入ろうとした。
- 磐余彦尊の兄五瀬命は、孔舎衛坂で流れ矢にあたって負傷した。
- 5月8日、茅渟の山城水門(やまきのみなど)に至った。ここで五瀬命は雄たけびをして、竈山に着いた所で亡くなり、葬られた。



□ 古代の地形は現代と違う。

➢ 大阪市内に湾が入り込み、この時代は汽水湖・淡水湖になっていた。

←大阪府HP

➢ 日下から龍田までは直線距離で10数km

➢ 大和川は、現在は西に向かい直行しているが、当時は、幾筋かに分かれ北上。

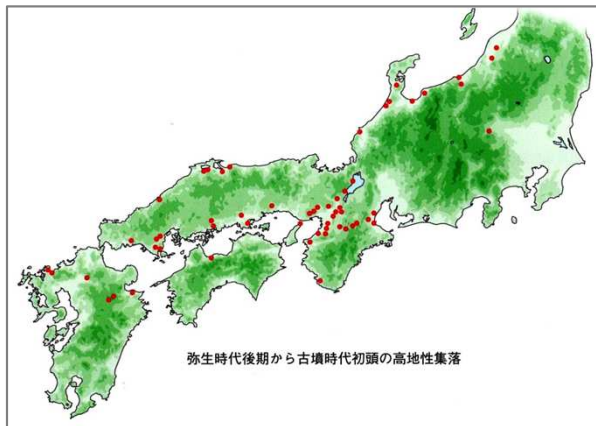
桂川光和著 日本建国史

<http://kodai.sakura.ne.jp/nihonkennkokusi/index.html>





# 大和側の防備



鳥見:長脛彦拠点

饒速日命拠点

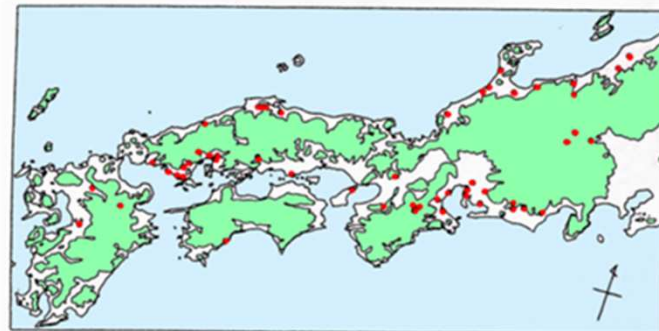
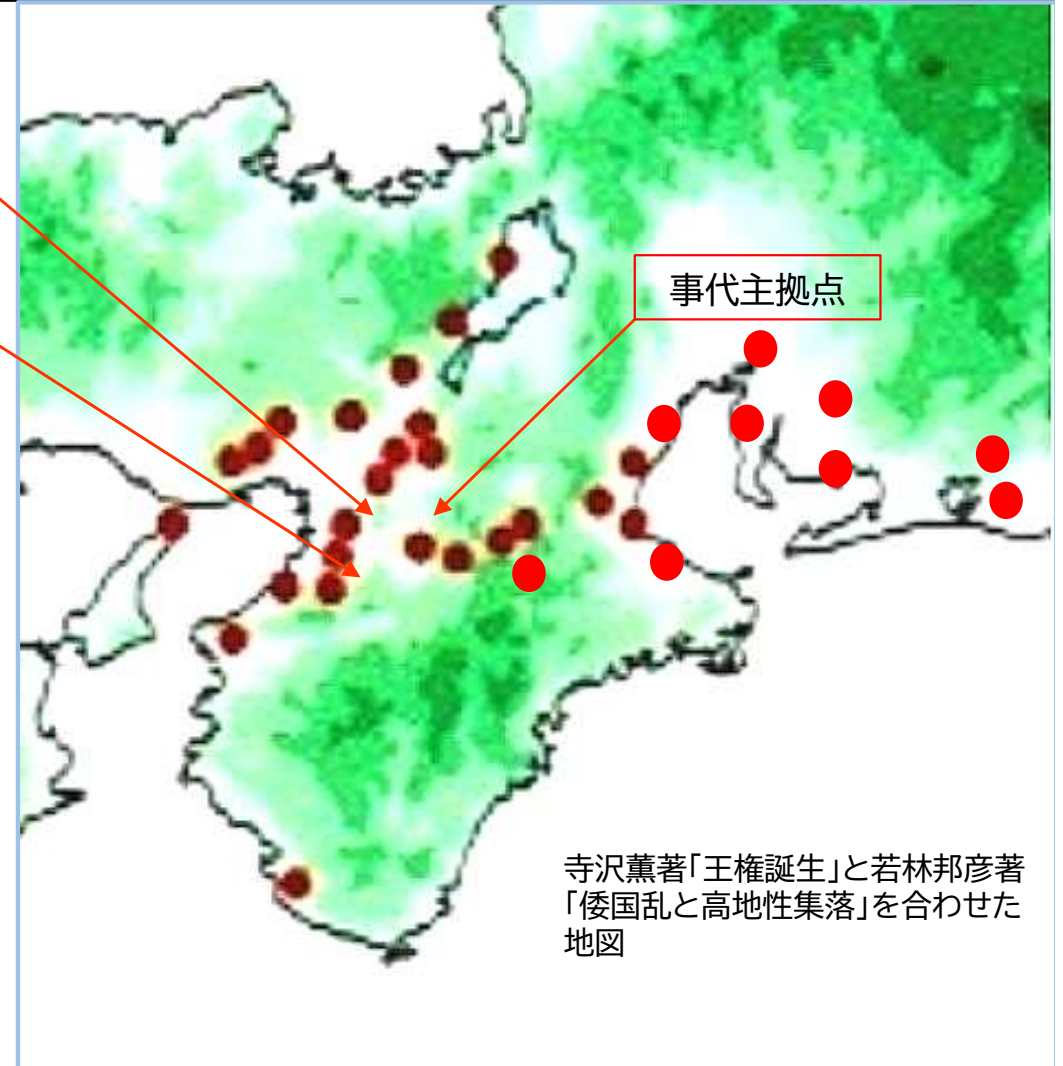


図49 「倭国乱」の頃の典型的な第二次高地性集落(寺沢薫「王権誕生」)



寺沢薫著「王権誕生」と若林邦彦著「倭国乱と高地性集落」を合わせた地図

	特殊な集落類型	一般集落と共通
都出比呂志 1974	Aタイプ 急峻な尾根筋立地	Bタイプ 標高 60 m 前後・比高 30m 前後
寺沢 薫 1978	第1類型 高い軍事性	第2類型 比高 40 m 以下で一般生産活動
石野博信 1979	山稜性 稜線立地	丘陵性 急峻ではないが特殊性もある

表1 ●高地性集落の分類 (1970～80年代)

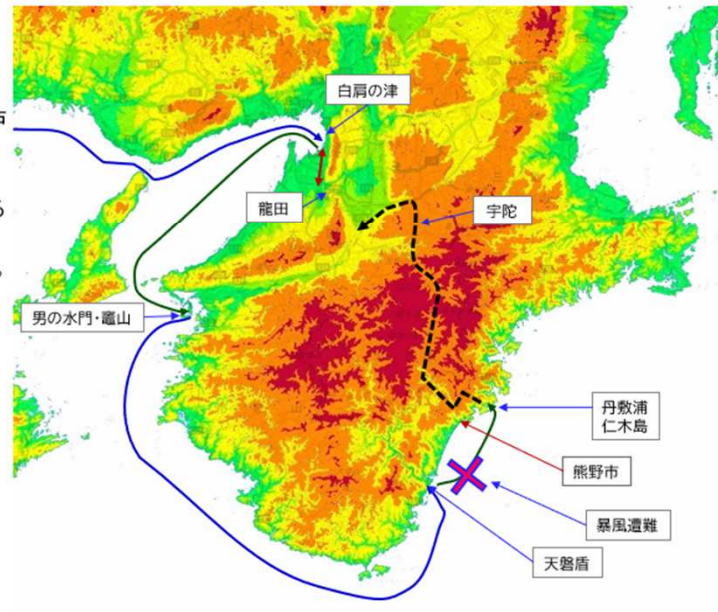
大和を守る側は天孫族軍の到来する箇所へ高地性集落を作成しとことが見て取れる。高地性集落は、戦争用か、否か？との議論で、著名な考古学者の意見は左の図の通り。3者とも、急峻な尾根筋に立地する高地性集落は軍事用と判断。丘陵部の集落は、一般集落と共通。

27 58 五瀬命死亡後、神武東征軍の大和までのルート

東征軍を率いた五瀬命が、矢傷で死亡。その後の行動は、古事記と日本書紀では記載の仕方に違いがある。

[古事記]  
 ・五瀬命死亡後、熊野村へ  
 ・兄二人が死亡した暴風の事などは不記載。

[日本書紀]  
 ・五瀬命死亡後、竈山近くの名草戸畔を殺害  
 (6月23日、後は月日不明が続く)  
 ・熊野の神邑に至り、天磐楯に登る  
 ・暴風に遭い、兄二人は遭難。  
 ・神武と息子などは丹敷浦に至る。  
 ・丹敷戸畔を殺害  
 ・記紀共に高倉下が剣を見つけ、八咫鳥の案内で、大和の東側の宇陀までたどり着く。



30 熊野から大和へ向かった神武一行

丹敷の女集落長の家にあったものを強奪したとしても、  
 ・普通の衣類(戦闘服ではない)を身にまとい、  
 ・数人に一人は剣を持ち、出立したと思われる。  
 ・旅行用の食料も十分に無いはず。  
 ・現在地も、目的地:大和の位置も不明で出発したと推定  
 ・何故か、八咫鳥と云う名の道案内人が見つかり、大和へ向かう。  
 ・食料を確保しながらの、サバイバル行と推定。

古事記と書紀ではルート記述が若干違う  
 ・古事記:吉野から紀ノ川の尻へ出て、宇陀へ  
 ・書紀:宇陀へ出て後に吉野へ  
 ・宇陀(菟田)に到着した頃の神武一行  
 ・神武一行は、10数人から数十人。  
 ・1か月ほどのサバイバル行進をえている。

現在の交通ルートで車で移動した場合、  
 ・熊野から奈良県宇陀まで、車で、トンネルの多い整備された大和へ向かった神武一行を通り100km以上。  
 ・山道・獣道を徒歩で通る道は、短くて200-300kmか。  
 ・最も雨の多い地帯の大台ヶ原に近く、標高1000mを超える山岳ルート。



29 丹敷浦(荒坂津)現・二木島湾について

現・二木島湾につ...

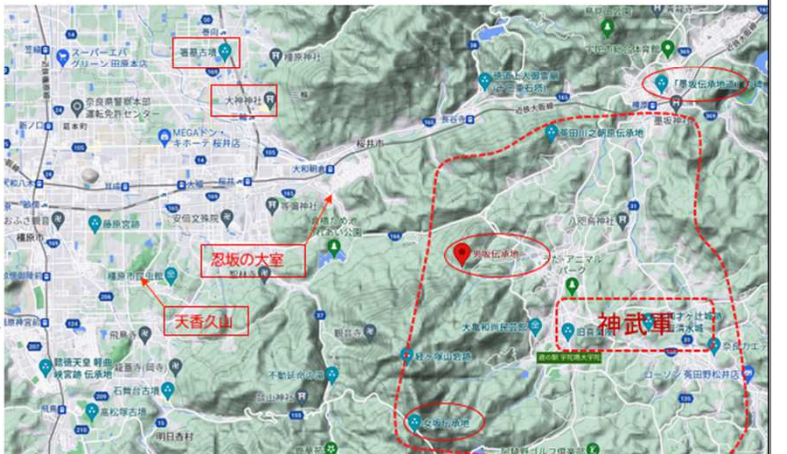
- 熊野市役所
- 神武一行の遭難/救助の推定場所
- 阿古師神社
- 室古神社

[二木島祭の関船]  
 一ツ方 取巻 カサヅキ 櫓  
 天鼓 天鼓  
 舟印 五色旗 船頭はあはれてあり 八丁番

32 磯城・天の香久山・忍坂の大室・墨坂の戦い

9月5日、磐余彦尊(神武)は菟田の高倉山に登ると八十梟帥や兄磯城の軍が充満  
 ・(敵の領地にある)天香久山の土で天平臺を造り神を祭るため、椎根津彦と弟滑(宇迦斯)が変装して、行き、土を取って帰る。成功すれば勝ち、不成功ならばと宣言し出掛け、成功したことで、士気を上げることに成功した。  
 10月1日、磐余彦尊は軍を発して国見丘に八十梟帥を討った。  
 ・忍坂の大室に至ると、尾生る土雲八十健が居た。(古事記)  
 ・宴会を催し、最中に突然、刀を抜き撃ち殺した。だまし討ち。  
 11月7日、八咫鳥に遭いさせ兄磯城・弟磯城を呼んだ。弟磯城のみが参上し、  
 ・兄磯城を、忍坂の大室付近でおびき出し、墨坂で、男坂からの軍を使って挟み撃ちにして、斬り殺した。

12月4日、戦いが続いた。勝つことができない。金色の鶯が弓に止まり、長彦彦軍を眩惑させた。  
 長彦彦は使者を送る。「本物の天孫かと問う」饒速日命と神武の天孫の印を見る。  
 饒速日命、長彦彦を殺し、神武に帰順した。



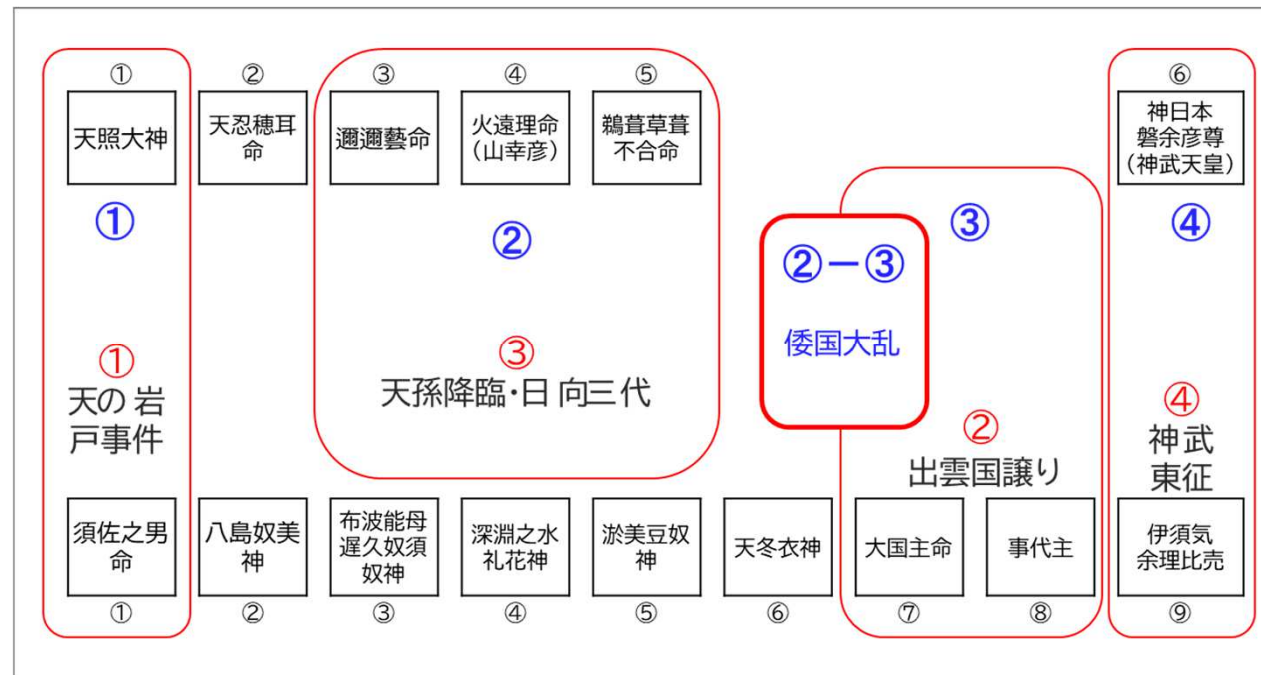
## 神武東征の考古資料との対比・対応

- 天孫降臨・日向三代から開始した考古資料と文献の対比・対応を考慮すると、天孫族・出雲族の最終決戦が行われ、直後の出雲の国譲りに引き続き行われたのが神武東征と解釈できる。
  - 神武東征の出発地は、したがって、最終決戦時の天孫族の本拠地であった日向＝前原・糸島地区とする。
  - 経路となった筑紫国の岡田宮・阿岐国の多祁理宮・吉備国の高島宮の位置を想定し、考古資料・古地図を検討し、存在したことが確認できた。
  - 津田左右吉の否定論があった白肩津・盾津も、大阪湾の古地図から確認ができた。
  - 旧大阪湾・生駒山地など、戦いの合った地域も古地図で確認でき、多くの高地性集落が防衛のために配置されていた事実も判明した。高地性集落の機能などを考慮すると、大和防衛側の勝利は納得できる状況。
  - その後の熊野の海岸までの移動は、考古資料・伝承から確認できる。
  - 紀伊山地の横断の経路は考古資料からは確認できないが、文献上も、少人数の神武一行が苦勞したことは伺える。現在の山中は、現地付近で見ても、地図上で調べても、困難な行程であったと思える。
  - 文献上、地名の出てくる宇陀などの地域は、地形上も、伝承、神社などでも文献に沿ったものの存在が確認できる。
- 以上、文献の東征ルートを進ると考古資料・古地図・伝承で確認でき、文献が歴史を記していたことが判る。

# 記紀神話と考古資料等との対比

- 記紀神話を時間と空間を整理して読み直すことにより、初めて、歴史的な解釈が可能になった。
- その歴史的解釈と考古資料/古地図/神社の存在と伝承などを対比し検討を加えた結果、双方が一致することが判った。
- 逆に、**考古資料**で明確に存在した北九州の**大きな戦争**が、日本の**文献史料には無く**、**中国の史料**に倭国乱と記載されていた。
  - 記紀には戦争の記載はないが、出雲族に押され、本拠地を捨て移動せざる得なかった**天孫族が**、**出雲国譲り**では、**突然、高圧的な態度で、剣を示し、国譲りを迫った状況は、その直前で九州での決戦に勝利した前提が無いと、解釈できない。**
  - 記紀では、記述の順番が大きく狂っている。その最大の理由は、北九州の大きな戦争＝倭国大乱と推定する。
  - 古事記では、神武東征のほぼ全員遭難と言う熊野灘での遭難を記載しない。古事記の作成時に、あまりに悲惨な出来事を記載しないと云う習わし/判断があったと推定される。

- 記紀に記されなかったことは、
  - 神武東征時に、元々の本拠地である北九州についての記載が、一切無い。



- 中国史書に記載された朝献した倭国の王
  - 西暦5年:「東夷王、大海を渡りて国珍を奉ず」(漢書・王莽伝)
  - 西暦57年:「倭の奴国王が後漢に朝献し、光武帝より印綬を授かる」(後漢書・東夷伝)
  - 西暦107年:「倭国王師升ら後漢王朝に朝献し、生口160人を献じる」(後漢書・東夷伝)
  - 西暦238年~:卑弥呼の朝献などの2千字の記載(魏志倭人伝・三国志・東夷伝)
- ✓ いずれも記紀の王と直接結びつく証拠は無い。
  - 西暦57年の「倭奴国王」の印に結びつくとなると、北九州に居た王と見られる。
- 中国に朝献した王と王墓が判明すると、中国の史書に記載された年代が該当することになり、年代観が明確になる。
- 西暦238年~248年頃に活動した卑弥呼が、記紀に記載されなかった事情と、関係が判明することが好ましい。

## ✓ 遺跡の王墓と対応しそうな王

- 王は、記紀から
  - 天之御中主から豊雲野までの五柱の「別天つ神」
  - 国之常立から伊邪那岐までの「神代七代」
  - 天照大神 ・ 天忍穗耳命 ・ 邇邇芸命 ・ 火遠理命 ・ 鵜葺草葺不合命
- 王墓は、遺跡から
  - 早良平野の最古の王墓
  - 福岡平野の須玖岡本の王墓
  - 前原・糸島地区の ・ 三雲南小路王墓 ・ 井原鍬溝王墓 ・ 平原王墓
- 王墓と王の対応候補
  - 早良平野の王墓:「神代七代」の王に該当か。
  - 須玖岡本の王墓: 天照大神
  - 三雲南小路王墓: 邇邇芸命
  - 井原鍬溝王墓: 火遠理命
  - 平原王墓: 鵜葺草葺不合命

✓ 早良平野:吉武高木遺跡で「最古の王墓」が出土 : これは天照大神以前の王と推定。

### 1. 須玖岡本の王墓: 天照大神

- 早良平野で王墓が成立した時代があり、
- その後に、福岡・早良平野で、板付け式土器から短期間だけ「城ノ越式土器」に変換する事件が発生。
  - 高天原を須佐之男命が攻め、占拠したことに該当する。
- 福岡平野に青銅器・鉄器・ガラス器などの一大工業地帯:テクノポリスが出現している。
- その工業地帯のすぐ近くに大型鏡・剣・勾玉の豪華な副葬品を持つ王墓が出土。
- 繁栄が続くが、後に一大工業地帯は区画整理され、別形態の工業地帯に変化。
- その後、破壊され、住居・墓が激減
- 天忍穗耳尊:
  - 天照大神の後を継承したが、出雲族の圧力が有り、長男の火明命は、出雲族に差し出した。
  - 軍隊・政治中枢・工業製品製造者を付けて、王位を譲り、次男を天孫降臨させた。
  - 出雲勢力に対抗する手段も無く、王墓は作られることは無かったと推定。

### 2. 三雲南小路王墓: 邇邇芸命

- 日向の地に、新しい天孫族の拠点を築き、出雲族への反撃の基盤を築いた。
- 中興の祖として、王墓は300年以上、地元の民が年々祀られた痕跡が残る。

### 3. 井原鏡溝王墓: 火遠理命

- 日向の地を築き上げた次代の王として、王墓に祀られた。

### 4. 平原王墓: 鵜葺草葺不合命

- 日向の地に祀られた王は、鵜葺草葺不合命の可能性が有るが、倭国大乱までに数世代の王が居た期間が存在し、本人か、その子孫か判定が付かない。

## 中國史書との王/王墓の関連

- 中国史書に記載された朝献した倭国の王
  - 西暦5年:「東夷王、大海を渡りて国珍を奉ず」(漢書・王莽伝)
    - 早良平野の王墓:「神代七代」の王の一人に該当
  - 西暦57年:「倭の奴国王が後漢に朝献し、光武帝より印綬を授かる」(後漢書・東夷伝)
    - 須玖岡本の王墓: 天照大神
  - 西暦107年:「倭国王師升ら後漢王朝に朝献し、生口160人を献じる」(後漢書・東夷伝)
    - 三雲南小路王墓: 邇邇芸命
  - 西暦238年~:卑弥呼の朝献などの2千字の記載(魏志倭人伝・三国志・東夷伝)
- 天照大神が朝献後50年後に、天孫降臨した邇邇芸命が朝見した時期は、天孫降臨が天岩戸事件の20-30年後との推察を考慮すると、適切な期間と考える。
- 空間的にも、この時の高天原が福岡平野でそこに天照大神の王墓が存在し、天孫降臨した先の前原・糸島地区に次の王墓が存在するのは、話に合致する。



## 卑弥呼・邪馬台国と神話との関係

- 神話では、邪馬台国・卑弥呼の適切な記載は無い。
  - しかし、関連しそうな内容で記載されなかった北九州の天孫族と出雲族の大決戦＝倭国大乱がある。
  - 神武東征の記述では、東征に出発した後の北九州の天孫族本拠地の記載がない。
  - 邪馬台国・卑弥呼が、五瀬達が出立した後に、本拠地を守った部隊とすると整合性が取れる。
- 魏志倭人伝に記された事項
  - 男を王として7－80年いた
  - 倭国は乱れ、相攻伐すること歴年
  - その後、一女子を共立し、王とした。その王の名は卑彌呼。
    - 以上から天孫族の男王7－80年いて、天孫族と出雲族の大決戦＝倭国乱があり、その後に卑弥呼が共立された。
- 以上の現象を、記紀神話と考古資料から見る歴史で行われた天孫族の王が居て、出雲族の大決戦を行ったこととみる。その後、天孫族が勝利し、出雲国譲りを行い、神武東征が行われた。その神武東征の時の起きたことが「共立」が行われたと推定できる。
  - 神武東征で天孫族の戦える人々は、東へ出発する。その時に、元々の天孫族の地＝北九州を守る残存部隊とその長が選ばれる必要があった。
  - 王である五瀬が残存部隊長を任命することは、可能であったが、決定者が離れる、いなくなる状況に、普段と違う対応が必要と考えたと推察する。残存部隊が一致して残存部隊長を支持する体制を作るためには、残存する主要部隊長を集め、衆議一決して決まることを求め、「共立」を行い、卑弥呼を選定したと推察する。残存部隊長選出は、適切な方法で行われたと見る。
    - 卑弥呼は、天孫族の長＝五瀬に近い人物であったと推定する。
  - 従って、魏の明帝への使者を派遣した238年から卑弥呼が死亡したと云われる248年までの10年間は、神武東征の長い遠征期間と重なったものと推定する。
  - 神武東征が不本意な形で成功した時期は、次の壺与が女王に就任し、その直前の争いが終結した時期に重なると推測する。

- 中国史書と倭国・天孫族の王を対応させ、記紀の神話のストーリーと考古資料を組み合わせ年表の試作を行う。
  - 一部の王の年代が確定したため、王の系図は、一般的な人の生存年代＝最大60～70才台とし、子供の誕生は10才台後半以上とする
  - 次頁にその試作年表を示す。
- 
- 試案作成結果、判明したこと
    - 西暦57年:天照大神が朝献し、邇邇芸命が107年:朝献とするとした。
    - 卑弥呼を神武東征中の九州残存部隊として、年表を作成すると
      - 凡そ100年間を火遠理命と鵜草葺不合命の2代で治めたことになり、人の寿命を考えると無理が有る。
      - 2代又は3代の王が存在したと考えられる。
        - 事件の順序と当事者を記した図中でも、出雲系の系図と比べ、天孫族が2～3世代不足していたことに相応する問題となった。
  - ✓ この年表では、検討してきた記紀による神話の歴史と、考古資料・中国史書が矛盾なく合致した。

BC  
100

90 80 70 60 50 40 30 20 10

AD  
000

10 20 30 40 50 60 70 80 90

AD  
1000

10 20 30 40 50 60 70 80 90

AD  
2000

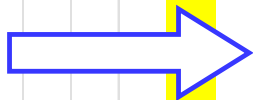
10 20 30 40 50 60 70 80 90

AD  
3000

# 古代年表・試案

2024/08

早良平野に天孫族の王墓が出現



天孫族と出雲族の争いが発生

天照大神 奴国王 朝献 金印

天の岩戸事件 須佐之男命追放

天照大神 天孫降臨

天照死亡 須玖岡本王墓に

火遠理命が王位継承

三雲南小路王墓に

鵜草葺不合命が王位を継承

井原鍵溝王墓に

名称不明① 王位継承

平原王墓に？

名称不明② 王位継承

出雲国譲り 神武東征へ出発

倭国大乱

卑弥呼女王就任 238年使者

神武天皇成立

卑弥呼死亡248年？

神武死亡 手研耳命 継承

手研耳命死亡 綏靖継承

天照

0 1 2 3 4 5

天忍穗耳

0 1 2 3

邇邇芸命

0 1 2 3 4 5

火遠理命

0 1 2 3 4

鵜草

0 1 2 3 4

??

0 1 2 3 4

??

0 1 2 3 4 5

五瀬

0 1 2 3 4

神武

0 1 2 3 4 5

手研耳

0 1 2 3 4 5

綏靖

0 1 2 3

安寧

0 1 2 3

絶対年代	473年 BC	400年 BC	300年 BC	219年 BC	212年 BC	100年 BC	AD 5年	57年	107年	200年	240年	248年	266年
中国史書上の日本関連	呉の滅亡(春秋)			徐福船団出航	徐福第二次船団出航		東夷王朝献「新」に	金印を賜う後漢光武帝	後漢に朝献倭国の帥升が		倭国乱	卑弥呼死去	晋へ使節派遣
日本全体	前原糸島	<p>4代の別天津神と天神七代</p> <p>開拓の時代(水田開拓)</p> <p>須玖岡本王墓</p> <p>天孫降臨</p> <p>海幸彦山幸彦天孫族神話</p> <p>糸島・前原に天孫族の中心移動青銅/鉄の生産急増</p> <p>北九州の大戦乱</p> <p>出雲の国譲り</p> <p>邪馬台国</p> <p>神武東征</p> <p>(岡田・安芸・吉備)</p> <p>饒速日命大和支配事代主隠居三輪山麓</p> <p>大和朝廷成立</p>											
	福岡平野												
	遠賀川												
	出雲												
	畿内												
米品種	初期 短粒米			「短粒米」が消滅し、「やや長粒米」が北九州を含む日本全土に拡散									
高地性集落								高地性集落遺跡 1期			高地性集落遺跡 2期		
戦争遺跡					戦傷遺跡 1期		戦傷遺跡 2期					戦傷遺跡 3期	
青銅器								青銅製武器/銅鐸→祭器				埋納	
神器	三種の神器などの墳墓へ副葬												